

2004 ユタ・コロラド紀行

金子 隆一

ゴジラが結ぶ旅の縁

そもそもの始まりは、2003 年の暮れ、新宿百人町の国立科博分館で開かれた、定例の「インフォーマル・セミナー」であった。その日、デンバー自然史博物館のケネス・カーペンター博士が、北米のヨロイ竜についての最近の研究成果を発表されるというので、筆者は他の用事をキャンセルして科博にかけつけ、貴重な映像と情報をたっぷり吸収させていただいた。

さてその夜、例によって新大久保駅前の雑居ビルの中にある安い居酒屋で懇親会が開かれたおりの事、たまたま空いていた筆者の隣の席に、遅れて駆けつけてきてひょいと座ったのが他でもないカーペンター博士である。これは千載一遇のチャンスが訪れたと思い、筆者は前からぜひ聞いてみたかった質問をぶつけてみた。

「あー、どくたー・カーペンター、わたしはひとつのしつもんをもちます。あなたのきさいした“ごじらさうるず”とゆうきょうりゅうのぞくめいのつづりは、Gojira となってます。えいごでひょうきするところの Godzilla となぜちがうありますか？」

「それはもちろん、ゴジラが日本生まれだからです。私の父はアメリカの G I ですが母は日本人で、私は子供の頃、母親に連れられて初代ゴジラの映画を観たんですよ。その時の印象があまりに強烈だったため、後に私は恐竜学の世界に進んだんです。ゴジラは日本語の発音で Gojira と書くべきです。やっぱりゴジラは初代にかぎりますね」

「それはわたしもおなじかんがえあるよ。ごじらえいがはあとになるほどどんどんちーぷになっていくおもいます。われわれはどうしあるね」

というわけで一瞬にして意気投合したわれわれと、その周囲に座っていた学生さんたちは、あーでもないこーでもないと恐竜談義や怪獣談義に花を咲かせ、その内話題が来年、つまり 2004 年の S V P 総会の件におよんだ。2004 年の S V P 総会はデンバーで開催され、当然博士のおられるデンバー自然科学博物館がそのホストとなる。

すると、何よりも気になるのが巡検ツアーのメニューだ。コロラドと言えば、恐竜発掘のメッカとも言えるべき歴史的なサイトがひしめく恐竜マニアの聖地である。その中でも、筆者にとって何よりも気になるのが、かのガーデン・パーク発掘場だった。

この HP の読者で、ガーデン・パークの名を聞いたことがない、という人は恐らくかなり珍しい部類に属するだろう。ご承知のように、ガーデン・パーク発掘場は、恐竜学史上に隠れもなき、エドワード・ドリinker・コープとオスニエル・チャールズ・マーシュの発掘競争の舞台となった場所であり、ここからは、ステゴサウルスの完模式標本（ただし、厳密にはいまだその完全な記載は行われていないらしい）、史上もっとも保存状態のいいステゴサウルスの標本をはじめ、アロサウルス、ケラトサウルス、エラフロサウルス、カンプトサウルス、ドリオサウルス、ディプロドクス、カマラサウルス、アパトサウルス、アンフィコエリウス、ハプロカントサウルスその他、ジュラ紀後期の代表的恐竜、しかも内いくつかは完模式標本が、1877 年から 88 年までの間に発掘されている。

それだけでも、ここはすべての恐竜者にとって一生に一度は押さえておくべき憧れの地であるが、もう一つ、大型カミナリ竜マニアの筆者にとって忘れられないのは、ここがあの幻の史上最大の脊椎動物、アンフィコエリウス・フラジリムス *Amphicoelias fragillimus* の見つかった場所でもある、ということだ。

いちおう念のために申し上げておくと、アンフィコエリウス属は 1877 年、コープのチームにより、ガーデン・パークで発見されたディプロドクス科のカミナリ竜の 1 つで、いまだ部分的な骨格しか知られていない、謎の多い恐竜である。模式種 アンフィコエリウス・アルトゥス *Amphicoelias altus* は、それでもディプロドクスとの比較により、推定体長 30 メートル、体重約 30 トンと見積もられ、生態復元画もいくつか発表されている（カミナリ竜が水中で浮力を利用して体を支えたという復元は、もともとアンフィコエリウスに対して行われたものである）。

ところが、同じく 1877 年にコープのチームが発見したアンフィコエリウスの第 2 の種、A. フラジリムスは、そういう恐竜学の常識から完全に逸

脱した代物だった。実際に発見されたのは、後部胸腰椎と思われる脊椎が1個、それも椎体のない不完全な棘突起と横突起のみであったが、その形態は完全にA.アルトゥスと同じであった。ただ、この化石がA.アルトゥスと決定的に違っていたのは、その寸法があらゆる次元において正確にA.アルトゥスの4倍あったということである。

ここから復元されたA.フラジリムスの脊椎の大きさは、高さ2.4メートル、さらに、これにもとづいて計算されたA.フラジリムスの体長は、小さめの見積もりで45メートル、体重130トン、大きめの見積もりで体長60メートル、体重200トンに達する。妊娠したメスのシロナガスクジラで最大記録が130トンだというから、A.フラジリムスは、小さい見積もりでも体重がシロナガスとタイ、体長はその6割増しということになる（カミナリ竜の大きさの見積もりはだいたい最小値に収束するというのが業界の不文律だが）。間違いなくこの動物は生命史上最大の脊椎動物であっただろう。

しかしまた、これもよく知られているように、A.フラジリムスはコープ自身による簡単なスケッチつきの短報1つを残してどこかに消え失せてしまった。本来ならその標本は、アメリカ自然史博物館に収蔵される予定で、標本番号も用意されていたのだが、コープの死後、化石は彼のコレクションの中から発見されなかったのである。とは言っても、晩年のコープは銀山への投資の失敗などがたたって相当生活が困窮しており、手元にあったコレクションのかなりの部分売り払っていたという。あるいは、A.フラジリムスの化石も、そうやってどこかのコレクターのもとに死蔵されてしまったのかもしれないし、あるいは、フィラデルフィアないしニューヨークの収蔵庫の奥に、梱包されたまま埃にまみれてひっそりと眠っているのかも知れない。

まあいずれにせよ、恐竜は大きいほど偉い、という価値観を持つ筆者にとって、恐竜界のキング・オブ・キングスが見つかったガーデン・パークは、いずれ訪れないではすまされない、強い思い入れのある土地でもあったわけである。

「それで、らいねんのじゅんけんはどうあるか。がーでん・ぱーくへいくつあーはあるあるか。もしあればわたしぜったいいきたいよ」

「いや、来年の年次総会はちょっと時期が遅いか

らね（11月3日～6日。例年は10月初旬）。その時期にはもう雪が積もってて車は入れないな」

「あいやー、だめあるか。それはざんねんある」
「いや、でも、ガーデン・パークに行きたいのならもっと早い時期にコロラドへ来ればいいじゃないですか。9月頃連絡を下さいよ。私が案内しましょう」

「えっ！　ほんとですか！　それはとってもうれしいのことよ、なにがあってもわたしかならずでんばーいくね。そのせつはぜひよろしく、おねがいします」

と、いうわけで、今回のプライベートなツアーが決定したというしだいである。筆者からその情報を聞いて、参加を表明したのは、毎度おなじみの恐竜イラストレーター、山本聖士氏。SF作家、野尻抱介氏。この2人とは、以前にもスイス、イタリア方面への個人的巡検ツアーをともした仲である。そして今回も、免許を持っていないわれわれにかわって、ドライバー役を野尻氏に引き受けてもらうこととなる。さらに、肉食爬虫類研究所を主催する富田京一氏、そして、「コンタクト・ジャパン」主催、関西SFファンダムのBNFでもある翻訳家の大迫公成氏の総勢5名。ただし、富田氏は途中合流で、日程のメインであるコロラドでの3日間の初日からわれわれと行動をと共にすることとなる。

かくして、去る2004年9月16日、まず東京組の筆者と山本氏は同じユナイテッドの夕方便で成田を飛び立ったのであった。

第1日 ソルトレイク・シティ～モアブ



ソルトレイク。シティにて、前祝い中の大迫氏と山本氏

事前にカーペンター博士とは何度かメールのやりとりをし、その合間に「平成ガメラ」第1作（博士はこの希代の傑作をご存じなかった）や「釈ゴジ」のリージョン・フリー変換済DVDもお送りし、大まかに日程を打ち合わせておいた。まず、9月21日に博士じきじきのご案内で、ガーデン・パークの日帰り巡検、次の日は丸1日を費やしてデンバー自然科学博物館のバックヤードと展示をじっくり見て回り、23日はわれわれのみで、コロラド大学ボルダー校の標本展示を見に行くというプログラムである。

しかし、せっかくこっち方面へ行くのなら、もっといろいろ見て回りたい。野尻氏は米本土は初めてということもあるし、ここはひとつ何日か余裕をもって、これまで筆者も行ったことのない南ユタ方面を中心に、物見遊山の日程も作ろうじゃないか、という話となった。すなわち、16日に筆者と山本氏、大迫氏、野尻氏がそれぞれ別便でソルトレイク・シティに集合、ここでレンタカーを借り、野尻氏の運転で、ぐるりと大回りをしながら20日夜にデンバーへ到着、ここで富田氏と落ち合おうという腹である。

われわれはサン・フランシスコ経由でほぼ午後3時にソルトレイク・シティ着。およそ1時間遅れて、関空から飛び立った大迫氏が無事ホテル着。さっそく3人で、夕暮れ近い町へぶらぶらと繰り出すことにする。

いまだ9月なかばとはいえ、ロッキー山地の中にあるこの町は、非常に空気がさわやかで風心地よい。大迫氏はもう30年も前、アメリカ横断

貧乏旅行をしていた頃にグレイハウンドでソルトレイク・シティを通りかかったことがあり、ものすごく安くてきたない宿に泊まった覚えがあるという。その頃から比べれば、今のソルトレイク・シティはそりゃもう隔世の感があるに違いない。筆者も、初めてこの町にきた20年ばかり前には、ホテルでビールを注文しようとして断られ（日曜日だった）、街角で、金髪碧眼長身の、見るからに好青年風の白人宣教師につかまってモルモン教に勧誘された覚えがある。それほど純度の高い宗教都市だったこの町が、今や筆者にとっては全米屈指のうまい自家製ビールを飲まずブリュワリー・パブのある町なのである。

その日は3人で本屋をひやかし、筆者行きつけのトレーディング・ポストで顔なじみの店主やナヴァホのおばさんと旧交を温め、夜はやはり行きつけのシーフード・レストランでタラバガニを食らい、ワインで祝杯をあげ、時差ボケ解消のため10時前にはさっさと寝てしまった。その夜11時頃、夢うつつで枕元の電話をとると、野尻氏がたった今無事到着したとの知らせである。これでひと安心。と思ったとたん、ぷつんと意識が途切れた。

翌朝は、いまだ夜も明けない内から目が覚めてしまった。この時差が体から抜けるにはもう何日かはかかる事だろう。ホテルのテラスから眺めれば、はるか南西の方角に、露天掘りの銅鉱山で有名なワサッチの山々がゆっくり朝日に浮かびあがってくる。ぼーっと景色に見とれている内に時がすぎ、やがて朝8時、大迫氏と野尻氏が部屋にやってきた。聞けば野尻氏は関空からシカゴ経由の便しかとれず、オヘア空港で長時間待たされた後やっとソルトレイク・シティにたどりついたのだという。ここから先の旅程は野尻氏の体力しだいなのでいささか心配だが、まあなるようになるだろう。死なばもろともだ。

全員で朝食の後部屋をチェック・アウト。1ブロック南のハーツの事務所へ、予約してあったレンタカーを受け取りに行く。そこそこゆったりしていて乗り心地はよさそう。

ホテルへ戻って荷物を積み込み、銀行へ寄って、両替がまだの人は円をドルに替え、さて今日の行程は、まずソルトレイク・シティから州間高速15号をまっすぐ南へ下り、途中リーハイで道を下り、まだ観たことがない人のために「北米古代



北米古代生命博物館

生命博物館」を見学。その後プロボの町で昼食、余裕があればプリガム・ヤング大学の「地球科学博物館」をちょと覗き、あとは州道6号をたどってひたすら南東をめざす。今夜の宿泊地であるモアブまで、プロボから300キロ弱、およそ5時間というところか。

しかし、走り慣れないアメリカの道ということもあって、最初は大変でこずった。何しろ、ソルトレイク・シティから出ることができない。州間高速に乗ったと思ったらいつの間にか真西へ向かう別の道に入ってしまう、いったん地上に降りてうろうろした末もう一度高速に入ると、今度はソルトレイク・シティの、それも今朝出発したホテルの近くに舞い戻ってしまう。気を落ちつけ、じっくり頭の中でイメージ・トレーニングを行い、もう一度トライすると、今度は首尾よく南へ向かう流れに乗ることができた。しかし、アメリカの道はいったん体に慣れれば非常に走りやすく、野尻氏の感想によれば、道路脇のスピード制限の数値はきわめて合理的にできており、このスピードを維持さえしていれば、スムーズに、疲れることもなく、ロードマップに書かれている通りの所要時間で目的地に到達することができるそうである。

程なく、車はリーハイ付近で高速から下り、道路の右手に広がる「サンクスギビング・ポイント」なるアミューズメント・パークに到着。その敷地の南の端に、外側に巨大な恐竜の絵を描いた、めざす「北米古代生命博物館」がある。木戸銭は大人9ドル50。

筆者はすでに、ここへくるのは通算4回目となるが、この博物館は何回来ても何か必ず新しい発



同ラボ



ティラノサウルス類とおぼしき謎の化石



同腰帯要素と尾椎

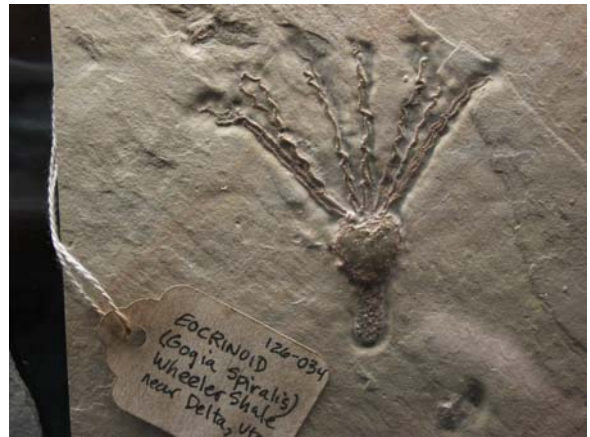
見がある。と、いって、ここは別にバックに大学や州政府や、大きな財団やらががついているわけではなく、遊園地に所属する純然たる営利団体なのだが、それでも、ちゃんと独自に発掘調査を行い（何とかいう民間の、ブラック・ヒルズみたいな化石発掘会社が実質運営を行っているらしい）、それなりの設備を持ったラボが付属していて、常時化石のプレパレーション作業を見せている。

昨年夏に来た時には、何やらオルニトレステスみたいな小型獣脚類の未記載の新属を作業室のガラス越しに並べていたが、今回はその隣に、もう1つ新しいクリーニング中の小型獣脚類が置いてある。素早く化石をチェックした山本氏が、これはティラノサウルス科ではないかという。言われて見ればその前足といい腸骨の形といい、確かにティラノサウルスのそれによく似ている。ここの博物館は、まだ自前のジャーナルはもっていないし、将来も出すかどうかはわからない・・・そもそも学芸員を置く意思があるのかどうかすらわからないが、これらの恐竜は、いつ、どこに記載されるのだろうか。先が楽しみだ。

ここの恐竜展示については、すでにたびたび日本でも紹介されているので、改めて詳しくは述べないが、恐竜だけが古生物ではないとちゃんとわかっている方には、ここの生命史のコーナーをたんねんに見て回ることを強力にお勧めする。とりわけ、ここの先カンブリア紀からカンブリア紀にかけての展示は間違っても見逃してはいけない。よその博物館ではまずお目にかかれぬ珍品、それも地元ユタで発見された貴重な化石が、さりげなくケースの中にひしめいている。

今回初めてそれに気づいてたまげたのは、このカンブリア紀のコーナーに、エオクリノイド（始棘皮類）などという激レア化石が置いてあったことだ。恐らくエディアカラ動物群の中に起源を持ち、カンブリア紀初頭に出現するとともに急激な適応放散をとげた棘皮動物門の中でも、もっとも原始的な体制を持ち、後のあらゆる棘皮動物のボディ・プランの原型になったとされるエオクリノイドの、そのまた最古の属と言われるゴギア *Gogia* を、筆者は生まれて初めてこの目で見た。いや、こんなにちっちゃい化石だったのか。しかし、確かにこれならウミユリにも座海星にもウミツボミにもなつてなれない事はない。こんな物を何の説明もなく、ただケースの中に置いとくなんて、ぜいたく極まりない話ではないか（ただし、近年ではゴギアを原始的な海果類の方に含める研究者も多い。エオクリノイドというのは、あくまでも標本につけられたラベル上の分類である。また、最近雲南省澄江で、これとタメを張る化石が出たようだが）。

他にも、そのまわりには、バージェス頁岩の写真集でよく見るあのさまざまなカイメン類と同



ゴギア（始棘皮類？）。体長2センチ



アノマロカリス類の触手



ディアゴネラ（カイメン類）。体長3センチ

じものや、この分類群としてはもっとも新しい、カンブリア紀最末期のユタ産アノマロカリスの触手なんてのも置いてある。前後に1本ずつしか触手のない、本物の海果類もゴギアと見比べることができる。眼福これに過ぐるものはなし。

ここは初めての皆さんはあちこちの展示にへばりつき、さかんにシャッターを切ったり化石の品定めをしておられる。今回は山本氏がいちばん



ユタラプトル

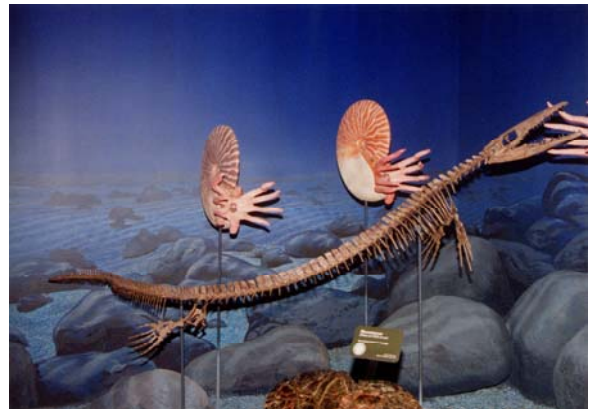


ガーゴイロサウルス

上等の撮影機材を準備し、腕もいちばん確かなので、いつの間にか山本氏が記録係を担当することになった。とは言うものの、こっちもいろいろ撮りたいものはある。特に、ここの海生爬虫類コー



アーケロン



ブラテカルパス

ナーは照明が暗く、デジカメではなかなかうまく撮れないので、今回はあえて古いイオスに強力なストロボを持ってきた。とりあえずは、この博物館名物の巨大なアーケロンの組み立て骨格、ティロサウルスにブラテカルパス、トキシケリスなど、フィルム3本分を撮りまくる。

いつの間にやら2時間近くが過ぎ、みなロ々にここの博物館の充実ぶりを讃えつつ、プロボへむけて出発。しかし、いつもなら、道沿いに走っているだけでむこうの山裾に見えてくる、BYUのシンボルとも言うべきあの巨大なフットボール・スタジアムがなかなか見あたらない。あれれ、とおもう内に、いつの間にか車は、来たこともないBYUのキャンパスの南端に出てしまった。あたりを歩いている学生さんに道を尋ねつつ、しばらく辺りをうろうろと走り回って、ようやくおなじみの地球科学博物館の小さな建物の前にたどりついた。

もっとも、ここの博物館そのものは、目玉となるような展示もない、ご愛嬌程度の規模である。それでも、トルヴォサウルスとミモオラペルタの

組み立て骨格は、他のどの博物館よりも写真が撮りやすいのだが。しかし、やっぱりここは展示よりもバックヤードである。本当にものすごい、価値ある標本はすべてこの奥の、広大なバックヤードにごろごろと横たわっている。しかし、今日はアボもなんにも取っていないので、勝手に入るわけにはいかない。昨年夏、ここのケネス・スタッドマン館長がおっしゃっておられたように、「北米古代生命博物館」はアミューズメントに特化した見せるための博物館、こちらは恐竜学の研究に特化した、収蔵するための博物館なのである。

ざっと見るものだけ見せていただき、すぐに退散。腹も減ったことだし、昼飯を食おうと町に出る。実は、ずっと以前、スタッドマン博士にランチに誘われ、連れていってもらったイタリアンの店が記憶にこびりついて今も忘れられない。博物館から車でほんの5分とかからない至近距離にあり、緑の屋根と大きな窓を持つ店で、パスタが非常にうまかった。ただ、その正確な場所をどうしても思い出せない。昨年夏、ツアーできた時も、その店を探してプロボの町中をうろうろしたあげく、入った店が茹ですぎの腰抜けパスタを出すダメダメ・レストランで、皆さんの不評を買ってしまった。今回も挑戦したのだが結果は同じ。たぶんこの建物ではなかったか、と思うものは確かにあったが、すでにレストランではなくなっている。閉店したのだろうか？

しかしまあ、やむなく入ったピザ屋がそこそこの当たりで、アメリカの庶民向け食堂の料理にご執心の野尻氏は大いに満足した様子だった。

さて、ここから先はひたすらモアブ目指して走るのみ。またもや例によって道に迷い、パトカーなどに道を尋ねた末、やっと目指す州道6号（ないし191号）に乗ることができた。この道が、時に清流沿いの谷間を、時に地平線まで続く荒野の中を走る、なかなか景色のいい、非常に快適な道路である。カー・ステレオでCDなどかけつつどンドン飛ばす。途中、これはと思う地層が見えると車を止め、路傍巡検を行うこと2回。こういう時やっぱり車での移動はいいなとつくづく思う。

やがて、道は州間高速70号線に合流。ちょっと東に走って再び南へ折れ、191号の続きに入る。すでに日は沈み、残照の残る空を背景に、道の左右にはものすごいような暗赤色に染まった



路傍巡検中の野尻氏

岩山が迫る。こりゃ明日が期待できそうだ。

それから程なくして、車は小さな町のメイン・ストリートに入った。ここモアブは、背後にアーチズ国立公園を控えた観光基地で、すでに旅行シーズンの盛りは過ぎたとはいえまだまだ大勢の観光客でにぎわっている。通りの左右に並ぶのは、大半がレストランかみやげ物店、さもないとツアー会社のオフィスだ。

メイン・ストリートに面したベスト・ウエスタンにチェック・インをすませ、ついでにロビーにたくさん置いてあるツアー案内を集めてみる。もうこの辺は全米屈指のオフロード・マニアの聖地で、とんでもなくヘビー・デューティな仕様の4×4・・・中には米陸軍の軽トラック、ハンマーで岩場を巡る、なかなかそそられるものもあった・・・でビュー・ポイントを回るツアーがさまざまな会社から1日に何本となく出ている。お好みしだい、マウンテン・バイクをレンタルして眺めのいい場所まで送迎してもらおうツアー、コロラド川でラフティングを楽しむツアーなんてのもある。やはり、ここらは並の車じゃとうてい行動できるものではなさそうだ。ここはひとつ、観光客に徹してみるか。ホテルのフロントで事情を探り、明朝その内の1つを頼むこととして、さて晩メシである。

初めての町の事とて土地勘もなし、みやげ物屋や本屋をのぞきながら（さすがに中西部の地質や動植物相を扱った本が多い）メイン・ストリートを往復し、これはと思うレストランを見つけて飛び込んだ。ステーキにもこだわる野尻氏の意見をいれ、今夜はステーキが狙い目である。

通された奥のテーブルの上には、なぜかクレヨ



モアブのレストランにて

ンのセットが置いてあり、テーブル・クロスのかわりに巨大な白い紙がかけてある。もしやと思い、尋ねると、ウェイトレスのおねえさんが言うには、これはお絵描き用クロスで、何でも自由に絵を描いていいという。

そうとなったら山本氏の出番である。さっそく彼はクレヨンを手にとり、無造作に、ものすごいスピードで巨大な羽毛ラプトルの上半身の絵を描き始めた。食事もしっこのけで、たちまち1点完成させた山本氏は、隣のテーブル・クロスに、今度はクビナガ竜の絵を描きあげた。われわれが食事を終えて立ち去ろうとすると、後ろでおお、声があがった。何かと思って振り向くと、あのおねえさんが、山本氏の作品を他のテーブルのお客に広げて見せているところだった。

第2日 モアブ〜ブランディング

翌朝、われわれはホテルの部屋だけ引き払うと、フロントで、面白そうなツアーの4時間コースを予約した。待つほどもなく、ホテルの正面に横付けになったのは、その名も「コヨーテ・ツアー」なる会社の、まっ黄色に塗った大型4×4である。車体はドイツ製のような。ものすごくギヤ比が高らしく、えらい音がする割には一般道ではさっぱりスピードが出ないが、いったんラフ・ロードに出たらこれがどれくらい威力を発揮することを後ほど痛感させられる。

ドライバー氏（社長でもある）は、どうもこの種の車を運転することが楽しくて仕方がない様子の、見たところ40そこそこのハッピーなおじさんで、荒馬にまたがったカウボーイのような雄叫びをほぼ3分置きにあげるのがかかにもそれらしい。お客はわれわれの他初老のご夫婦のみ。無愛想な鋼鉄のシートに座り、しっかりとシートベルトを締めると、車は薄曇りの空の下、風を切って走り出した。両脇も天井も鋼鉄のフレームでがっちりと固めてあるが、壁もガラスもな

い吹き抜けであるから非常に気持ちがいい。

町の裏手の高台へと登って行くと、いきなり車は道路を逸れ、激しく浸食された剥き出しの砂岩層が果てしなく連なる、実にワイルドな眺めの高原に飛び出した。まーこっから先のライドがすごいものの、歩いたってとても踏破できるもんじやない、激しく起伏する岩肌の上を、ともかくしゃにむに4×4はよじ上り、よじ降りる。車の能力のデモンストレーションに、1／1以上はあると思われる勾配をバック・ギヤで後ろ向きに登ってしまう。こればかりはどう逆立ちしたって絶対日本で味わえる感覚じゃない。



コヨーテ・ツアーのメルセデス・ベンツ MOG。

バック・ギヤで岩を上るデモンストレーション中。

それにしても、さすがに本場は違うと申しませうか、ありとあらゆるタイプのオフロード・マニアが、この広大な岩のうねりのいたるところに



こういう場所を走り回る



こんな人たちがやたらにいました

入り込み、テクニックのかぎりを尽くして走りを楽しんでいる。マウンテン・バイクの達人の走りなんてえのは大した見物ですな。さし渡し 10 メートルはありそうな、ほぼ半球形の砂岩のドームを一気にがりがり直登すると、そのままの勢いで反対側を駆け下り、うわっあぶね、と思った瞬間、カモシカのように自転車ごとぴょんとジャンプしてもう次のドームの表面を登っている。こんなところで事故ったら、どうやって救出するのだろう？ などと、他人の事ばかりのんきに心配してられる立場でもないのだが。

いつしか空もきれいに晴れ渡り、最高に見晴らしもよくなった頃、われわれはこのツアーの一番の目玉とも言えるべき絶景ポイントに到着した。コロラド川が深く深く岩肌を削りながら大きくヘアピン状にカーブする、いわゆる「ビッグ・ベンド」を真上

から見下ろす断崖の上に出たのである。

崖の高さは 100 メートル以上、150 メートル未満というところか。ドライバー氏が、こっちに本当の特等席があると、ぎりぎり崖っ縁にわれわれを誘おうとするが、いやいや私はここで十分。こんな広漠たる空間を前にして、ただぼーっと風に吹かれているのが私にとっては極楽なんです。そこへ、おあつらえ向きに、1羽のワシが峡谷の中ほどをすーっと音もなく滑って行く。谷底から吹き上げてくる風が岩角にあたって笛のような音をたてる他、何も聞こえない。いや、たまに、バイクの音がどこか遠くから響いてくるだけか。

「俺はこんな景色を見るためにこの仕事をやっているようなもんなんだ」という、故・井上編集長の言葉が耳に蘇る。そりゃそうでしょう。よくわかります。私だって、今おんなじ気持ちでこういう旅を続けてるんだから。

十分にこの風景を堪能したわれわれが町に戻ったのは、その日の午後 1 時半のことだった。今朝のホテルの前で下ろしてもらい、遅めの昼飯を食った後、さて、考えて見るとわれわれはまだアーチズ国立公園最大の呼び物、天然の石のアーチを見ていないことに気づいた。いや、実は先刻、断崖の上でドライバー氏にそれを尋ねたのだが、答えていわく、アーチが集中しているのは川の向こう側で、こっちにはこれがある、と、車を止めた場所のすぐ近くで足元を指さした。なるほどアーチには違いない。指 2 本は入らない、アーチズ国立公園で最小のアーチだそうだ。まあ、一発ギャグとしては気がきいていたが。

でも、どうせ今日はこの後何も予定はない。で



コロラド川を見下ろすビュー・ポイントにて



故・井上編集長と



公園内コートハウス・タワーズ



アーチズ国立公園で最小のアーチだそう



こちらで勝手にネフェルティティと命名させていただきました。でも古代中国の王かも

きたら、なるべくユタの南の方まで移動してどっかのモーテルにでも泊まろうという漠然とした案があるだけだ。それなら、時間が許すかぎり、アーチのある公園の方を回っておこうと衆議一決する。

町を北へ抜け、昨日通った、左右に岩壁の迫る道を北上すると、間もなく右手に公園への入口が見える。ゲートのインフォメーションの前で車を止めると、案内のおねえさんが顔を出した。と、大迫氏が彼女を指さして「I remember you! 」と声をあげた。見れば、ありや、昨夜のウエイトレスのおねえさん。昼間はこんな所でアルバイトをしているのか(どっちが本業なのかは知らないが)。

公園内の案内図をもらい、ビュー・ポイントをめぐるって歩く。もうややこしい説明はしない。写真をご覧いただきたい。ただ、何しろアメリカの国立公園だから中は相当広い。ここはむしろこじんまりした公園だが、それでも南北 30 キロ、東西 20 キロはある。あたりの景色に見とれ、1つ1つのビュー・ポイントに時間をかけている内、



スリー・ゴシップス。名前のいわれは不明

かんじんのアーチにたどりつく時間がしだいになくなってきた。じゃあ、ここのシンボルであり、ユタの写真集には必ず出てくる、あの「デリケート・アーチ」だけでも拝もうじゃないかってんで車を降り、トレイルをたどっていつてみると、あれ。この道はアーチの下に出る道じゃなくて、谷を隔てた向こうにアーチを見上げるポイント



バランス・ロック

へ続く道だったんだ。大迫氏の双眼鏡を借りて見ると、小さく見えるアーチの下に、さらにずっと小さく、蟻のように大勢の見物客が見える。当然のことながら、アーチそのものは相当でかいのがわかる。

うーん。あの側まで行ってみたい。しかし、時刻はすでに夕方4時を回り、とうてい向こう側まで行っている時間はなさそうだ。残念。ここは次回きた時、もう一度じっくりと見て回ることにしよう。それまで、あのアーチが崩れるということもあるまいし。

町へ戻り、ガソリンとスナック類を補給し、いざ南へ向かって出発。今日は、ここから南へさらに100キロばかり下ったブランディングという町を目指すことにする。この町を選んだのは故なき事というわけでもない。この町には、あのお騒がせ屋、スティーブン・ツェルカスが個人で営む恐竜博物館があり、例のアーケオラプトルが、どうやら今でも展示されているらしい。さすがにもう、新種と名乗ってはいないだろうが。

ちょうど明日は日曜日で、博物館も書き入れ時だろうから、あわよくばツェルカス本人にもお目にかかってみたい。てなわけで勇躍州道191号を

南へとたどり始めたのだが、やがて、とっぷりと日が暮れ、あたりが闇に包まれる頃合いから、大粒の雨がばらばらと降りだした。われわれは州の南部を覆う広い雨雲の中に突入しつつあるらしい。その内、あっちでもこっちでも激しい雷がひらめき始めた。そのたびに、真っ暗な地平線のシルエットがぱっと音もなく浮かび上がる。気象マニアで、台風が接近すると喜ぶ野尻氏は非常にうれしそうである。

走り続けること2時間少々、雨足も弱まり、ほぼ止んだかと思われた頃、地平線の向こうからばらばらと町の明かりが浮かび上がってきた。アメリカのカントリー・サイドを夜間に走っていて、時たまこうして人里に出ると、本当にほっとする。もっとも、こんな田舎町、ちょっと油断していると、5分もかからずメイン・ストリートを駆け抜け、後はふたたび明かり1つない荒野の中に出てしまう。

この町も、信号のある交差点を2つ3つすぎるともう町並みが尽きてしまうような小さな田舎町にすぎないが、そのぎりぎり町外れに、「サンセット・イン」なる小さなモーテルがあった。幸い表には空室アリの表示が出ている。しかも、一泊25ドルと激安だ。即座にここに泊まろうと決定し、車を乗り入れた。

フロント、と言うのか、棟割り長屋形式の建物の中央の事務室に入ってみると、オーナーと覚しき初老のおじさんが、エプロンをかけて何やら油絵を描いている。この人がずいぶんと話好きの親



デリケート・アーチ

切な人で、絵は自分の趣味であるという。こっちにも恐竜画のプロがいるよ、という話になり、山本氏が自分の作品を見せると、おじさんは意外なことを言いだした。実はおじさんはツェルカスと個人的な知り合いで、自宅もその電話番号も知っている。残念ながら博物館は日曜休館だが、自分が電話で頼めば明日も開けてくれるだろう、日本から恐竜画家や恐竜ライターが来ていると言えれば歓迎してくれるに違いない、との事である。これは願ってもないところへ飛び込んだもんだ。

しかし、おじさんがかけてくれた電話は留守電につながっていた。恐らくツェルカスはどこかに出掛けているようだが、明日の朝、自分がここに戻ってくるまでには連絡がつくだろうという。ご親切に感謝しつついったん部屋へ引き取り、その夜はやや遅い食事を、おじさんに教えてもらったステーキ・ハウスでいただいた。ただし、ここは外れ。肉は固く、最初は愛想のよかったおねえさんも、閉店時間が迫るにつれてさっさと出ていけという態度に変わる。何よりいけないのは、この店にはビールもワインもない。ビール瓶そっくりの瓶入りドリンクは、みなノン・アルコールカリソジュースである。しまった！ここはドライ・タウンなんだ！後で、モーターの部屋に置いてあった町の紹介パンフレットを読んでみて納得がいった。ここは、1860年代にモルモン教徒の開拓民が住み着き、発展して行った町なのである。はあー、それで日曜日には博物館も閉まっちゃうんだ。てえことは、ひょっとするとアレか、ツェルカスもかなりディープなモルモン教徒ということなんだろうか？まあ、明日に期待しよう。とりあえず今夜はおやすみなさい。

第3／第4日 ブランディング～サンタ・フェ～デンバー

あくる朝は、昨日に続いて本格的な雨。モーターのオフィスは閉まったままで鍵がかかっている。はて、どうしたんだろう？

しばらく待つ内、8時45分になってようやくおじさんがピックアップ・トラックでやってきた。話を聞くと、残念ながらツェルカスの家には今誰か知り合いが来ているらしく、彼はその人と泊まり掛けで出掛けているようだという。したがって、



ブランディングの恐竜博物館

博物館もお流れである。残念だが、まあ仕方がない。これで、次回またここへ来る口実はできた。最後におじさんは、遠来のあなたたちにぜひ贈りたいものがあるという。いや、もう大体見当はついてるんですけど……あ、やっぱり。おじさんが1冊ずつわれわれにくれたのは、黒い装丁の分厚い「モルモン経」。もしかしたら、これをどこか近くの教会まで取りに行行って遅くなったんだろうか。ご厚意はありがたくお受けしておきましょう。

朝9時、ブランディングを出発。事のついでに、近所にあるツェルカスの博物館を外観だけでも拝んで行こうと、ちょっと寄り道。それがこの写真である。場所柄から考えればなかなか立派な建物だが、HPで見るとかぎりにおいては、目玉になる展示はどうやらなさそうだ。例の、背中に棘のある（いまだに未記載の）ディプロドクス類の研究プロジェクトがここで進められているらしいが、それが完了したあかつきには、その復元骨格はここに展示されることにでもなるのだろうか？楽しみではあるが、もうちょっと、交通の便が何とかならんもんなー。

などと思いつつ、篠つく雨の中、再び191号を南へ向かう。と、言って、別にあてがあるわけではない。ここからそう遠くない所にアメリカ南西部の観光名所の1つ、フォー・コーナーズがあるのでそこに立ち寄り、そこからさらに足を伸ばして、サンタ・フェまで行ってみようかな？どうしようかな？というところである。別にサンタ・フェに恐竜博物館があるわけでもないが、ただ単に筆者は以前訪れたことがあり、街の雰囲気独特で気に入ったから、という程度の理由である。

それにしても雨足はますます強くなり、路面に水の膜が張っているため、たまに先行する車の轍に乗るとハイドロプレーン現象を起こして車がすーっと滑走する。けっこうおっかない。雨雲の垂れ込める右手の地平線に、一際黒く何本もの柱が立っているようにも見える。あれは漏斗雲？ いや、すでに竜巻に成長したか？ 車をとめて皆で目をこらすはどうやら違ったようだ。残念。

やがて、ブラッフという町に到着。ここから先はアリゾナ、ニュー・メキシコにまたがる広大なナヴァホの居留地で、この道をこのまま南西に進むと、ジョン・フォードの映画でおなじみのモニュメント・ヴァレーであるが、今回はあいにくとそこに立ち寄っている時間がない。これも次回のお楽しみとしておこう。そういえば、ブランディングの町でもあちこちでジョン・ウエインの写真を見かけた。あの町が撮影基地だったらしい。

ブラッフで遅い朝食、つかランチだな。われわれが入った食堂の裏手には、その名もツイン・ロックスという、巨大な岩のこけしを2つ並べたような奇岩がそそり立つ。店の中はなるほど、お客も店員も半分以上ナヴァホ族である。さすがに、人口 60 万以上の北米最大の部族だけあって、売店では「ナヴァホ・タイムズ」という新聞も売っている。記念に1部購入する。



ツイン・ロックス

ここから州道 163 号に乗り、東南東へ向かうことほぼ1時間。「ニュー・メキシコへようこそ」の標識を超え、州道 41 号と名前の変わった道をもうちょっと進んで右へ曲がるとほどなくフォー・コーナーズである。何がフォー・コーナーズなのかというと、緯線と経線に沿って引かれたユタ、アリゾナ、ニュー・メキシコ、コロラドの州境がこの1点で交わるからで、アメリカではここが唯一、同時に4州を見渡せるポイントなのである。



フォー・コーナーズにて

ここもまだ、ナヴァホの居留地の中である。有名観光ポイントとして部族政府の重要な収入源となっているようだ。道路脇に居留地のゲートがあり、そこに入ると、ごらんのように4州の旗に囲まれて、州境の交点を示すプレートが埋め込んでいる。もちろんここへ来た人間は1人残らず、このプレートの上に立って記念写真をとることになっている。

その儀式を済ませ、周囲を見回すと、おや。中央のプレートを取り囲む常設屋台は、みんなインディアン・ジュエリーの店ではないか。何軒かのぞいて見ると、これがぶったまげるほど安い。ほとんど原価じゃないのか、これ。渋谷のパルコに入ってるインディアン・ジュエリーの店なら、どう見ても3万円は下らない大粒のターコイズとサンゴと黒曜石のモザイクのネックレスがせいぜい50ドル。こりゃ買わなきゃ損だ、いや、いっぱい買って帰って日本で転売したら相当な利益やがかせげるじゃないか、などと一瞬いらん事まで考えるが、いやいや俺はそんな事をしにきたんじゃない。知り合いの誰彼の顔を思い浮かべつつ、お値打ち品と思われるものを1つ1つ選んで



インディアン・ジュエリーの直売屋台の1つ。ともかく安い

行く。いやー、こりゃいい買い物をしたわい。ほくほくしながら車にのり込み、再びサンタ・フェ目指して走り出す。

道はアリゾナの北東の角をかすめ、ニュー・メキシコへと入る。ここから州道 64 号に乗り、ファーマントン、ブルームフィールドを経て南へ曲がり、44 号に乗り換えてどんどん進む。しかし、車が雨雲に追いついてしまい、再び雨の中に入ったため、どうも道がはかどらない。途中、キューバという名の田舎町で休憩し、さてどうしたものかと相談する。

このままサンタ・フェを目指そうか、それともいいかげんの所で引き返してデンバー方面を目指すべきか。サンタ・フェへ向かうとしても、地図の上では近道に見える裏道をとるべきか、それとも、このまま 44 号を南下し、州間高速 25 号に入るべきか。

さっそく大迫氏が聞き込みに回り、地元の人しか知らない貴重な道路情報を仕入れてきてくれた。それによると、山道をたどった場合サンタ・フェまで6時間かかる。しかし、南へ向かうと圧倒的に道がよく、その半分以下でサンタ・フェにたどりつけるとの話。そうとわかれば話は早い。南回りでサンタ・フェだ。幸い雨はあがって雲も切れ、薄日がさしてきた。これならそう時間はかからないに違いない。

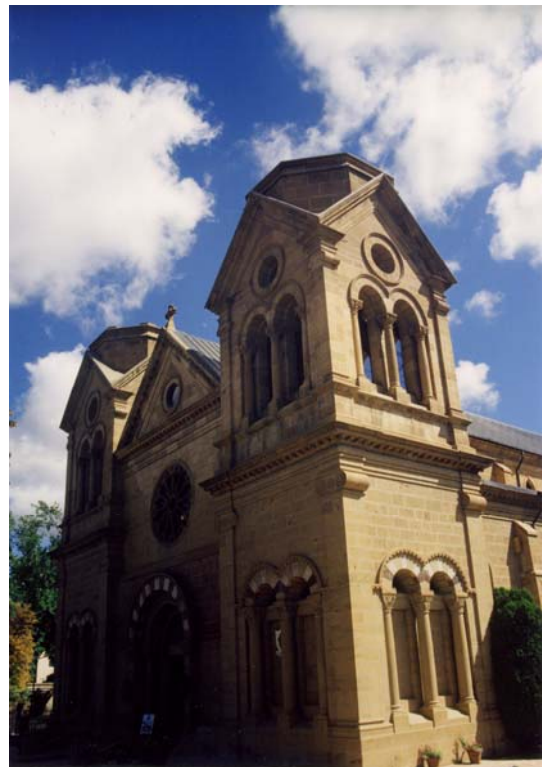
考えてみると、この道は大分前・・・あれは6年前（98年）であったか、故・井上編集長や長谷川善和先生、山本氏などといっしょに走った覚えがある。あの時は、ニュー・メキシコ自然史博物館の車で、この道を北へたどり、ゴースト・ランチへ向かったんだった。

道路からはるか西の方には、なかば雲に霞んで、円錐台形の奇妙なシルエットの山が見える。ワイオミングの「デビルス・タワー」とまったく同種の火山活動でできた玄武岩の柱状節理の塊である。そうそう、昔たしかにこの山を見た。

道路の左手を、「サン・イジドロ」の地名表示がかすめすぎる。セイスモサウルスが発見されたのはここだ。空はしだいに晴れ渡ってくる。いいぞ。行く手にサンディア山系が見えてくる頃には、すっかり青空となっていた。

間もなく、道は州間高速 25 号に合流する。ここを左へ曲がり、さらにおよそ 40 分。282 番出口を出れば、いよいよサンタ・フェである。さっそく宿を確保せねば。

ところが、町中に入り、地図に出ている観光案内所を探してうろうろ走り回るが、どこまで行ってもそれが見つからない。町の入口まで戻り、その辺の店で尋ねてみると、なんと日曜日は観光案内は閉まっているとの話。一体何のための観光案内なんだ、と怒ってみてもしょうがない。最初に見つけたモーテルに飛び込みで値段を尋ねてみると、これが意外に高い。それでもオフ・シーズンのディスカウント価格なのだという。もっとも、実際にはここはモーテルと言うより、かなり設備のいいリゾート・ホテルなのであった。



サンタ・フェの教会



サンタ・フェの街角



この色彩を見よ！



サンタ・フェを象徴するもう1つの色彩

とりあえず部屋に落ちついたところで、晚メシを食いに旧市街へと繰り出して見る。

しかし、この町もまた道がややこしい。何しろアメリカ合衆国が成立するよりも前からメキシコの総督府が置かれ、南西アメリカの経済と文化の中心地であった由緒ある町だ。

旧市街は再開発せず、道も昔の街道のままである。

それでも何とか、町の中心のプラザへとたどりついた。すでに時刻は8時近く、表通りにはほとんど人がいない。多くの商店もドアをしめ、ただショウ・ウインドウだけが皓々とあかりを灯している。そうか、日曜の夜にはもう観光客はいないんだ。でも、ショウ・ウインドウの中に並んでいる商品がどうもただ事ではない。一目みただけで立ちすくむような、超一級品のインディアン・アートが所狭しと並んでいる。いやいや、あせるな。明日、少しでも時間をとって、もう一度ここへ戻ってこよう。今はまずメシだ。

だが、残念なことに、以前この町で食事をしてたいへん気に入った、いわゆるテックス・メックス(テキサス・メキシコ料理)レストランの名店、某カフェは、なんだか酔っぱらいが大勢騒いでいる、ちょっと感じの悪い店になり果てていた。やむなく、プラザに面したもう1軒の店に乗り換えると、こっちの方がずっと落ちついた渋い店で、料理もなかなか悪くない。例によって地元のビールにワインにステーキをしっかりと腹におさめ、例によって道に迷いつつ宿に帰る。明日は、このふらふら旅の最終行程、一気にデンバーをめざす移動距離最大の日となるはずだ。今夜はひたすら、ぐっすり眠ろう。

てなわけで、あくる朝。宿代にコミとなっていた朝食は、よくあるいかげんなコンチネンタルではなく、けっこういろいろなメニューのそろったごくまともなものであった。

十分に腹を満たし、フロントでデンバーまでの所要時間を確認すると、州間高速25号を走って約6時間との事である。前にも述べたが、アメリカでは、何らかの事情で道路が渋滞していないかぎり、制限速度ぴったりで走っていれば本当に言われた通りの時間で目的地にたどりつく。じゃあ、今日は午前中いっぱいサンタ・フェにいられるわけだ。

それっ、てんで車に飛び乗り、昨夜のプラザへとやってくる。駐車場に車をとめ、では11時半

にここへ集合ということで解散。

今日は昨日までとはうって変わって抜けるような晴天である。ニュー・メキシコの高原の空の色は、ちょっと形容を絶する。地上の明色の建物などにカメラを向けると、空はほとんど群青を通り越して紺色に写る。町並みもまた、このあたりに特有のアドビ（日干し煉瓦）色の外装に統一され、ちょっとよそでは見られない景観だ。もっとも町の中心部にはさすがに本物のアドビ建築はなく、外観だけその色に似せたテンブラ・アドビだが。



アンドレア・フィッシャー陶芸ギャラリー

そして、プラザをとりまく一角は、なかば以上の建物がギャラリーである。聞けばサンタ・フェは、全米で一番アーティストの人口密度が高く、とりわけインディアン・アート（絵画、陶芸、宝飾など）に関してはここが全米最高峰であるというが、確かに並のみやげ物屋の品とは氏素性からして違う、目もくらむような逸品ばかりを置いた店が続く。

もう、これを買おうとかあれが欲しいとか言う気力も起こらない。実は筆者は以前からインディアン・ポッターリー、それもシード・ポットという、



メキシコ側諸部族の作品



アコマ族の陶芸家フレデリカ・アントニオの作品



至芸としか言いようがありません

手のひらに乗るサイズの小さな壺を集めており、ここへくればその逸品も入手できるであろうと思わないではなかったのだが、だめだ。ここで扱われているのは、各部族の名のある陶芸家たちの入魂の大作ばかりで、とうてい筆者のような素人貧乏コレクターの出る幕ではない。それらがどんな代物であるか、写真を見ていただければおわかりであろう。

この写真は、さる陶芸専門のギャラリーで撮らせてもらったものである。およそアメリカ南西部の、アナサジの流れを汲むプエブロ諸族はみな陶芸の伝統を持つが、この店ではその中から選りすぐりの作品だけが、部族ごとのコーナーにまとめである。店のいちばん奥のケースの中には、恐らくすべてのインディアン・アーティストの中でももっとも高名な、サン・イルディフォンソ・プエブロの女流陶芸家（ほとんどのインディアン陶芸家は女性だが）、マリア・マルチネスの本物が数十点も並んでいる。彼女の作品を一度にこれだけ見たのは生まれて初めてである。展示品（売り物でもあるが）をぐるりと見て回っている内、アコマ族特有の、白い陶土の壺や皿を集めた一角に目が釘付けとなった。一見したところ薄墨を吹いたような、灰色の地味な大皿のようにしか見えないが、目をこらしてよく見ると、ものすごく細かい線描でいちめんに麻の葉文に似た模様が描きこんである。

あまりに線が細かく、緻密であるため、無地に見えるという、ほとんど江戸小紋の世界である。彼女らは、これを葦の茎の芯に墨を含ませたもので、下絵もなしにいきなりフリーハンドで絵付けして行く。描線にはまったく乱れもためらいもない。柳宗悦もハダシで逃げ出す至芸の世界である。

なかば呆然となりながら、それでも時間がきたのでやむなく駐車場へ戻ってみると、なんだ、まだ誰も来ていない。しばらく待つ内、ようやく皆帰ってきたが、そこでお互いが今日の収穫を見せあい、「あの店は見た？」「えっ、そんなものがあったの？」「じゃもういっぺん行ってみよう」てな感じで、また飛びだして行く。いいやもう。富田氏は今日の夕方にはデンバーのホテルに到着しているはずだが、悪いけど少々待っていただくかなさそう。いやー、この町は長居すればするほど深みにはまって行く。くそ、もう1日あれば、せめてジョージア・オキーフ美術館だけでも



ニュー・メキシコ北部を走る州間高速 25 号

押さえておきたかったな。

いつまでいてもきりがないので、正午過ぎ、後ろ髪を引かれる思いでサンタ・フェを出発。州間高速 25 号に入り、コロラドを目指す。

最初の内は、ニュー・メキシコ南部特有の植物景観を示す山間をぬって走っていた道路も、やがて、見渡すかぎり地平線しか見えない、果てしなくだだっ広い大平原に出る。遠くの方に点々と、野性のアンテロープの群れが草を食んでいるほか、何1つ視野を遮るものはない。時たまその中にぽつんと孤立した農家があるだけだ。こんなところで、人間はどうやって生活必需品を入手し、暮らして行けるのだろう。やっぱり、最寄りの町まで週に1度くらい、何時間もかけて買い出しに行くのだろうな。

しかし腹が減ってきた。考えてみれば今朝、ホテルの朝飯を食って以来、何も口にしていない。ひとつ、アメリカのロードサイドの本当の田舎町を見てみよう、あわよくばそこで本当の田舎町の食堂なるものも体験してみよう、というわけで、スプリングというニュー・メキシコの古い開拓町へ降りてみる。

ご存じの方は、ピーター・ボグダノヴィッチ監督の「ラスト・ショー」という映画を思い出していただきたい。あの、アメリカの大平原のどまん中にぽつんと忘れ去られた田舎町、たった1軒の映画館と食堂の玉突き台が町の娯楽のすべてというようなあの町。まさにあの感じである。しかし、アメリカのあらゆる地方都市がそうであるように、こんな町にも必ずアンティーク・ショップだけはある。町の規模からすると不釣り合いなほど



スプリングの古道具屋にて

大きいその店を皆でのぞいてみると、開拓時代から町中の人間が残してきた生活の記録が所狭しと店中に並んでいる。ガラクタと言えはガラクタかも知れないが、見る人が見れば狂気乱舞もののお宝なのだろう。50年代から60年代の、バドワイザーやコークの看板なんて、鑑定団にでも出せばすごい値段になるんじゃないだろうか。あ、そういや、この辺はかのルート66が通っていたはずだ。さぞやバグダッド・カフェみたいな店もあるに違いない。

アメリカの生活雑貨に目がない野尻氏と大迫氏は、夢中でガラクタの山をかき回している。やがて、野尻氏はアメリカの周波帯域の古いトランジスタ・ラジオとひげ剃り、大迫氏はジョン・ディー社のトラクターのおもちゃを発見、大喜びで購入する。大迫氏はしっかり値切り交渉も行っている。技術翻訳が本職の氏は、このトラクターのマニュアルの翻訳も手掛けているが、氏の説明によると、なんでもこのトラクターはアメリカの農場風景に欠かすことのできない名脇役で、多くの映画にも登場し、ジョン・ディーのトラクターのファン・クラブまであるという。後にこのおもちゃが、ちょっとしたネタをわれわれに提供してくれることとなる。

果して、思った通りこの町のただ1軒の小さなホテルには食堂があり、まさにこちらが望んでいたようなカントリー・スタイルのハンバーガーを食べることができた。歪みの入ったガラス窓ごし

に、ニュー・メキシコの青い空と隣家の屋根、その上の風見鶏がなんとも言えないたたずまいを見せている。うーん、たまらん。今度はひとつ、こういうアメリカの田舎町だけを回るツアーをやってみようかなどと皆で話し合う。

だが、時刻はそろそろ3時を回る。ちょっと余裕をかましすぎたか。念のため、デンバー自然科学博物館に電話を入れ、カーペンター博士に、明朝8時半、われわれ5名がおじゃますることを確認しておく。

じゃあ、残りの行程を一気につつ走るといたしますか。道はすでにほぼ真北を指し、しだいにコロラド高原へ向かって標高が上がって行く。州境を越え、なおもどんどんつつ走る。コロラドに入っておよそ1時間半、プエブロの町を通過。ここから西へ曲がると、明日われわれが行くことになっているキャノン・シティである。さらに北上し、コロラド・スプリングスにさしかかったところでほぼ日が沈む。ここで最後のガソリン補給とトイレ休憩。もう一息だ。

やがて空も真っ暗となり、それとともに、今まで順調に流れてきた高速もしだいに車の数が増えて流れが鈍ってきた。そろそろデンバーの都市圏内に入ってきたのだろう。夜空を見上げると、デンバー空港に降りる飛行機の灯が、くっきりとグライド・パスをなぞって数珠つなぎに見える。そして、地平線の向こうから、デンバー市街の灯の海が浮かび上がってきた時は、久しぶりにみる（と、言っても、ソルトレイク・シティを出てからまだ4日しかたっていないのだが）大都会のにぎわいに、不覚にも感動してしまった。

高層ビル群の下をかすめ、車の流れをかきわけ、210番出口を降りれば、すぐ目の前がデンバーのダウントウンである。われわれのホテルはその目抜き通りのすぐ近くだ。

さすがにこれだけ走ると、ただ乗っているだけでも疲れる。野尻さん、本当にご苦労様でした。これで、彼はもう長距離を運転することはない。フロントでチェックインをしようとしているところへ、富田氏が登場。今日の夕方ホテルに到着

し、4時間ほどわれわれを待っておられたとの事である。部屋に荷物を放り込んだ後、さっそく4人で目抜き通りへと繰り出し、通りに面した大きなカフェで無事合流を祝って祝杯をあげる。

いよいよ明日は今回の旅のハイライト、ガーデン・パーク探訪である。

第5日 ガーデン・パーク

9月21日朝。モーニング・コールを頼んでおいたものの、6時には自然に目が覚めてしまった。遠足当日の小学生の気分である。

ところが、部屋の中が妙に薄暗い。もうこの時間なら、かなり明るくなっているしかるべきなんだが。

先に起きていた富田氏が心配気に窓の外を眺めている。やや！こりゃまたどーいうこった！窓の外はどんより曇り、霧のような小雨が降っているのではないか。おまけに窓の外を低い雲まで流れて行く・・・と思ったら、さすがにこれは向かいのビルの排気筒から出る湯気であった。

が、それにしてもこれはヤバい。急いでTVの気象情報をつけてみると、うわー。太平洋岸と大西洋岸を相次いで襲ったタイフーンとハリケーンにより、通常この季節、安定しているはずの気圧配置が大きく変動し、メキシコ湾から流れ込む湿った空気がちょうど大陸のど真ん中を抜けて北へと向かう流れができてしまっている。その結果、西海岸と東海岸はみんな晴れマークなのに、ニュー・メキシコ、コロラド、ワイオミングなどの各州だけがすっぽりと雨雲に覆われ、降雨マークが散りばめられている。

今日の予定はどうなる？この天気で、本当に現場へ入れるのか？ひょっとしたら、今日の巡検は取りやめになるんじゃないか？だとしたら、今日は博物館のバックヤードめぐりということになるのだろうか？ともかく、どう転んでも対応できるような準備をしておいた方がよさそうだ。

いちおうフィールドに出られるような服装とカメラだけは整え、朝8時、ホテルのエントランスに集合する。昨日まではこの車に4人が乗るだけだったから何も問題はなかったが、今日からは5人である。しかも、実は今夜の宿は決まっていない。当初、カーペンター博士か

ら、3日間を空けておくとうかがった時、フィールドで2泊3日を費やすのかと思い、ホテルは20日と23日の夜だけ押さえておいたのである。その後、日程が固まってからも、まあいいや、その時はその時だと適当に考えていた。しかし、この3日間デンバーから離れないとなれば、このままこのホテルに居つづけた方が、動き回る手間がはぶけるだけありがたい。しかし、ここは便利だけに高くつく。どっちにすべきか、全員の意見がまとまらない内に何となく、一晩でホテルを引き払うことになってしまった。

さてそうすると、5人分の荷物をトランクに押し込まなければならない。あーでもないこーでもない苦心の上、やっとうまくおさまる方法を発見し、さて出発となったが、このどさくさにまぎれて、大迫氏が手提げ袋を1つ、ホテルの柱の影に置いてきてしまったのに気づいたのは、大通りへでて2、3分も走ってからの事だった。

しまった！あの袋の中にはジョン・ディアのトラクターが入っている！そりゃ大変だ、男の宝物だ、何が何でも取り戻さねばならぬ！瞬時に全員の意見が一致する。ここでアメリカ映画なら、急ブレーキを踏んでスピン・ターンをかまし、タイヤから煙をあげながら爆走するところなんだが、と野尻氏は残念そうである。いやー、この中に女が1人もいなくて本当によかった。

幸い、われわれの至誠が天に通じたか、袋はそのまま柱の影に残っていた。無事ジョン・ディアを回収し、再び博物館へと向かう。

デンバー自然科学博物館はダウントウンの東、コロラド・ブルーヴァードに面したシティ・パークの一角にある。時間に少々余裕を持って出たため、それでも8時半にはぴったり博物館の正面に到着した。車を停め、さて、カーペンター博士を呼び出せばいいのかなとあたりを見回すと、玄関脇の職員通用口から、青いヤッケを着た小柄な人物がつかつかとやってくる。あっ、カーペンター先生！われわれを待っていて下さったのですか。ないす・つー・みーちゅー・あげいん！

全員を紹介し、握手もすんだところで、さて、先生のお車で先導していただけるのでしょうかと尋ねようとする、先生は博物館の前に停めてあった、8人はゆったり乗れる大型の4×4にわれわれ全員を招きよせた。え？この車でご案内いただけるのですか？

それは有り難うございます！ まあ、そうですね。こんな普通の車で入れるような場所じゃない事は最初からわかっていたんですから。

「あの一、きょうわたしでんきよほ一みました。おてんきだいじょうぶあるですか？」

「まあ、南の方は大丈夫だと思うよ。ともかく行くだけ行ってみましょう」

先生がそうおっしゃるなら否やはむろんありません。全員車に乗り込み、筆者は助手席に座らせていただく。先生が、皆にご自分の論文「マーシュとコープの恐竜」、および「コロラド州キャノン・シティ近郊の主要な恐竜発掘サイト」のコピー、おまけにミネラル・ウォーターのボトルまで手渡してくれる。何から何まで、本当に申し訳ありません

ばらつく小雨を突いて車は走り出した。さすがは地元を熟知した先生、コロラド・ブールヴァードからいちばん空いているルートを選んで、するするといともかんたんに州間高速 25 号に入り込み、南を目指す。ただ、まだ朝のラッシュ・アワーは終わっていないと見え、しばらくの間は時速 40 キロほどのとろとろ走行が続く。

「ところで、どくた一・カーペンター、すこしおうかがいしてもいいのことか？」

「何でしょう？」

「わたしまえにきいたあるよ、あなたとうきょうでうまれてさいしょのごじらのえいがみたおっしゃった。あのえいがせんきゅうひゃくごじゅうよねんこうかいね。そのときあなたごさいかろくさいだった。そうですね？ じゃ、にほんごすこしはおぼえてますか？」

「いや、私はたしかに東京で生まれてるけど、1歳の時に両親がこちらへ引き上げてきたから、全然日本語は知らないんだ。母はずっと英語を使ってたしね。私が母に連れられてゴジラを見に行ったのはこっちへ来てからの話ですよ」

「あっ、するとそれはかいがいば一じょんのごじらあるね？ “かいじゅうおうごじら” とゆうたいとるで、れいもんど・ば一がしんぶんきしゃのやくででてるやつ」

「そうそう、ペリー・メイスンをやったあの人」

なるほど、それで先生が日本語を話さないわけがわかった。何しろカーペンター博士は見た目まるっきり日本人で、背丈もわれわれの誰よりも小柄である。その上、妙に筆者の周囲の人間と共通

する、ある独特の雰囲気を感じられる。要するに、コミケとかワンフェスとかの会場に立っていても、まったく違和感なく周囲の空気に溶け込んでしまう、あのアトモスフェアが漂っているのである。どうも、ケネス・カーペンター博士と呼ぶより、ケンちゃんないしケン坊と呼ぶ方がしっくりくる。後にいただいたお便りには Ken-ichi と署名があった。聞けば先生の母上は今でもご健在で、コロラド・スプリングスにお住まいである由。まだ 73 歳だそうである。それで先生が 55 歳（奇しくもこの日が先生のお誕生日であった）ということは、母上は 18 歳でカーペンター博士を産み、19 歳で渡米したことになるわけだ。当時の事とて、いろいろとご苦労もあったのではないだろうか。もっとも、コロラド州では、カリフォルニアなどと違って、日系移民の市民権は戦争中も保証されていたそうだが。

こうしていったん話の糸口がつかめると、一気に話題は濃い方面へ突っ走り出す。ゴジラの系統上の地位についてどう思う、と振ってきたのは先生の方だった。初代ゴジラがオキシゲン・デストロイヤーで溶けて死ぬ寸前、一瞬見えたあの骨格の特徴からして、あれはきっと基盤有羊膜類からごく初期に分岐し、そのまま巨大化した原始的爬虫類に違いないと思う、と筆者は答え、富田氏は、あれは恐らく単弓類（哺乳類型爬虫類）であろうと主張し、先生は、いや、あれは高度に特殊化した獣脚類であると述べ、三者相譲らず、その内に話題がそれて、ゴジラは内温性か外温性か、車内で議論が始まった（確か、抗核バクテリアが体内で増殖できないほどゴジラの体温は低いではなかったか？ その割に、ゴジラのサーモグラフを映画の中で何度も見たような記憶もあるが）。筆者がその事を先生に伝え、先生はきっぱりと答えて曰く、「もちろんゴジラは内温性に決まってる。あれだけ高温の火炎を作りだす熱源が体内にあるんだからね」

一同深く納得する。

てな事をしゃべっている内、車はコロラド・スプリングスで 25 号を降り、ショート・カットである州道 115 号に入って、まっすぐキャノン・シティを目指す。ちなみに、キャノン・シティは、ロードマップでは Canon City と書いてあるが、正しくは最初の n の上に～がついていて、スペイン式の発音でキャニオン・シティとなる。つまり、

コロラドがメキシコの植民地だった頃の名残りの1つである。道路の左右は、ネズやトウヒのまばらな植生で覆われた山並みが続くが、すでにこのあたりから、モリソン累層の露頭があちこちにのぞいている。

やがて、115号が120号と合流し、もうじきキャノン・シティに入るといふ頃、先生が車を走らせながら遠くの山並みのふもとにぼつんと見える、銀色の給水塔らしきものを指さした。あれは連邦刑務所で、実は、スーの所有権をめぐる裁判で敗訴した後、ピーター・ローソンが服役していたのがあそこなのだという。うーん、彼ははるばるサウスダコタからあんな所まで流されていたのか。済んだ事とはいえ、しばし感無量。

車はキャノン・シティの小さなダウンタウンを抜け、ここで曲がって州道9号に入る。ちょうどその曲がり角に小さな観光案内と駐車場があり、その前にカラフルなステゴサウルスの実物大モデルが置いてある。確かにこの町はステゴサウルスの故郷なのだから、こんな物があっても不思議はない。置くならこここそ世界で一番ふさわしい場所と言える。

ならば日本人観光客たるもの、ここで記念写真を撮らないわけにはいくまい。車を止め、全員でかわるがわる写真撮影。造形と彩色はごらんの通りのレベルだが、尻尾のスパイクがちゃんと横に開いているところといい、のどに皮骨質の粒子の表現らしきものが見られる点といい、さすがに本場ならではの気合を感じさせる。ついでに近くのウォルマートでトイレを借り、再び出発。この頃にはすっかり雨もあがり、雲の切れ間から薄日が射してきた。さすがにプロは天候の読みも違う、と感心する。



キャノン・シティのステゴサウルス

ほどなく車は9号を降り、住宅街を抜けて農道のような道に入る。と思う間もなく道は山の間に分け入り、くねくねと曲がりながらしだいに高みへと登って行く。周囲の渴ききったむき出しの山肌は低いネズの疎林に覆われ、背の高い木は1本も見当たらない。

山道に入ってちょっと行ったところで、カーペンター博士は車を路肩に停めた。何があるのかと思ったら、道路脇の岩の陰に、インディアンの古い岩絵が残っている。いつの頃のものはわからないが、保存は非常にいい。ただ、何を描いたのかはわからない。きわめて単純なシンボルがいくつか見えるだけだ。



ガーデン・パーク入り口。インディアン岩絵

さらに数キロ、溪流沿いに道路を走ったところで、不意に先生は左にハンドルを切り、舗装された山道を外れて、山の斜面につけられた未舗装のラフ・ロードに乗り入れた。激しく体を揺さぶられながらでこぼこ道に行くこと2キロ弱。車は尾根道の上で停車した。われわれはここで車を降り、錆びた針金のフェンスをまたぎ越え、さらに山の中へ向かって歩きだす。

写真でおわかりのように、植生は乏しく、あたりは開けていて歩きやすいが、かつてはこの道を、コープの発掘体は馬と橇だけを使って巨大なカマラサウルスの骨格を運んだのだという。そして、例のアンフィコエリアスの脊椎も。4×4で現場近くまで乗り付けることなど思いもよらなかった1870年代当時、その苦労はいかばかりであったことか。

足元に気をつけていないと、ところどころ、鋭



コープス・ニップルへ続く山道



中央の小山がコープス・ニップル



地形を確認するカーペンター博士と大迫氏

い棘のびっしり植わったサボテンが生えている。道の真ん中に転がっていた古い動物の糞はコヨーテのものだそうである。このあたりでキャンプしていると、夜にはサソリやタランチュラもぞろぞろ出てくるんだ、と先生がうれしそうに言う。

やがて、ガーデン・パークの谷間を眼下に一望できる平坦な尾根の上にたどりついた。その真ん中に、ぽこんと岩が突き出しており、ここは「コープス・ニップル（コープの乳首）」発掘場と呼ばれている。何を隠そうこの場所こそ、1877年にコープのチームが最初のカマラサウルス、そしてあのアンフィコエリ阿斯・フラジリムスの脊椎を発見した場所なのだという。コープの残した、非常にラフな発掘現場のスケッチだけを頼りに、デンバー自然科学博物館のチームがこの場所を割り出すまでに相当な苦労があったようだ。

「乳首」の後ろへ回り、平坦にならされた地面を指さしながら、このあたりであのアンフィコエリ阿斯の脊椎が出たんだ、と先生が説明する。ただ、半径数十メートルくらいまでは絞り込めたが、本当にピンポイントではその場所は特定できないという。

「じゃあ、このへんほったらまだでてくるかもしれないあるね」

「あるいはね。しかし、数年前、一度地中レーダーをここに持ち込んで調べたことがあるんだが、その時は何の反応も出なかった。もっとも、その時の探査では、このあたりを一直線にこう調べただけだったけど」

と、カーペンター博士が示した範囲はせいぜい幅2メートル、長さ30メートルほどしかない。試験的にやってみた、というだけのようだ。ぜひ、このへん一帯くまなく走査していただきたいものである。ちなみにこの発掘場では、1994年にデンバー自然科学博物館のチームも、非常に大型のカマラサウルス、C.スプリムスを発掘している。これで発掘が終了したわけではなく、まだまだここでは調査が続けられるそうだ。

ここからちょっと離れた場所に、コープのチームが岩を積み上げて作った、化石の一時収蔵庫の跡がある。とは言っても、今では剥き出しの地面の上に丸く石を積んだ痕跡が残っているだけだ。造りが雑だったため、ある時化石を中にしまったまま崩れてしまったそうな。その時に壊れた化石の破片が今でもいっぱいそのあたりに散らばっ

ている。皆夢中で大きなかけらを探す。

さらに数百メートル、尾根道を行ったところに、もう一つの発掘場がある。ここでもやはりコープのチームによってカマラサウルスが発掘されているが、こちらは地層の状況がなかなか興味深い。すなわち、ガーデン・パークにおけるモリソン累



この付近のどこかであの巨大な脊椎が出た



崩れた化石倉庫の跡で化石のかけらを拾う



あたりには多数のサボテンが生えている

層の最上層部ぎりぎり直下の露頭が横に掘り進められており、その上にひさしのようにつきだしている灰色の石灰岩層は、すでに白亜系上部まで飛んだセノマン階下部の海成堆積層、ライトル累層である。不整合面をはさんで 4000 万年以上のギャップがあるわけだ。この層をまず除去した後、その破片を現場の前にていねいに積み上げてシェルターにしてある。

ちなみに、ここはまだモリソンの本当のアップパーモストというわけではない。いちおうチトン期前期に達してはいるが、本当の最上層部はすでに浸食されてなくなり、ここにはジュラ紀-白亜紀境界は存在しない。より正確に言えば、北米全体でも、まだモリソンが直接白亜系最下部に接触している場所を確認されていない。場所によってはチトン期もかなり後期までモリソンが続き、一説によればモリソンは白亜紀最初期まで続いたのではないとも言いが、まだ公式な報告が出たわけではないようだ。これほど有名で、研究者も多いフォーメーションにしては、意外にわかっていない事が多い。しかし、今のところ知られているかぎりでは、ここはもっとも新しいモリソンの露頭の 1 つであり、われわれが見ているのは北米におけるジュラ系陸成堆積層のいちばんおしまいの部分なのである。

いただいた資料によれば、1999 年にカーペンター博士はコロラドのモリソン累層を（非公式にはあるが）2つのバイオゾーンに分割している。このガーデン・パークでは、下部 50 メートルほどが「ハプロカントサウルス帯」、上部 150 メートルほどが「カマラサウルス帯」で、今われわれがいるのはそのカマラサウルス帯の中でもぎりぎりてっぺん近くである。このあたりになると、カマラサウルスも、50 メートルほど下で何体も見つかったグランディス種よりはるかに大きいスプリムス種ばかりになる（翌日、その違いを博物館でじっくり見せていただいた）。ついでに言えば、ハプロカントサウルス帯でたくさん出るアロサウルスも、このあたりではぐんと数が少なく、そのかわり非常に巨大なものが出る。コープの、いわゆる「エパンテリアス」もここから発見されている。ただし先生はこれを固有の属とは認めておらず、アロサウルスの後期超大型種と考えておられるようだ。

車に戻り、先ほどの山道を下って溪流沿いの舗

装道路に出る。そこからさらに1キロほど川に平行してさかのぼったところで再び車を停める。左手に小さな谷があり、その北側斜面にか細い道がついている。先生は先に立ってその道を登りはじめた。後に続くと、数百メートルほどで、山の中腹を切り開いた小さな平地に出た。谷の方は切り



カマラサウルス・スプリムスの発掘現場



上に張り出しているのは白亜紀後期の海成堆積層



不整合面を指さすケンイチ氏

立った崖になり、振り向くと、さっき車を停めたあたりがよく見える。本当に道路からちょっと入ったにすぎない。そして、実はここが他にもない、1877年、コープとほぼ同時に仕事を始めたマーシュのチームのサイト、「フェルチ発掘場」なのである。

そもそも、ガーデン・パークでコープとマーシュが発掘勝負を開始したのは、1876年のある日、ちょうどこの場所で地元の牧場主、マーシャル・フェルチの家族が巨大な骨を発見し、その事実が翌年1月、地元紙「キャノン・シティ・タイムズ」に報道されたことがきっかけだった。この記事に興味をそそられた地元のアマチュア研究家2人がガーデン・パークへやってきて「鳥」の化石の入った岩のブロックを採集し、さらにその話を聞きつけたのが、マーシュのエージェントの1人、デヴィッド・ボールドウィンであった。

彼はガーデン・パーク一帯を調査し、「鳥」（今日ではハロプス、すなわち四肢の長い陸生のワニであったことが判明している）が見つかった層準の約5メートル上、後の「コープス・ニップル」の直下において、多数の大きな骨を発見した。しかし、マーシュは「鳥」の化石にこだわっていたため、ボールドウィンはその現場を放置したまま、コロラド・スプリングスの「珍品屋」で売りに出されていた「鳥」の化石のみを買い取って、ニューヘヴンのマーシュのもとに発送した。マーシュはさっそく、現地で発掘要員を集め、ガーデン・パークへ送り込んだ。そして、彼らが最初に作業を開始したのが、現在の「フェルチ発掘場」だったわけである。

一方その間に、ガーデン・パークの山の分校で非常勤の先生をしていたコープのエージェントの1人、オーメル・ルーカスは、ボールドウィンが放置していた現場を独自に再発見し、そのサンプルをフィラデルフィアのコープに送った。コープはさっそくその化石をクリーニングし、1877年8月、まずその内の肉食恐竜の顎の断片をラエラプス・トリヘドロドン、カミナリ竜の化石をカマラサウルス・スプリムスとして記載した。

コープとマーシュの仲違いが決定的になったのは、1872年、コープが、暗黙の内にマーシュの縄張りとなっていたモンタナ南部に入り込み、その哺乳類化石の記載を先に発表してしまったことにある、と伝えられている。どうもコープ

はそういう事にはあまり気の回る人物ではなかったらしい。ここでも、コープ側は現地で作業員を募集し、「コープス・ニップル」付近での発掘作業を遠慮会釈もなく開始した。先にツバをつけたにもかかわらず、発表でコープに先を越され、



フェルチ発掘場



ハプロカントサウルスのタイプ標本はここで見つかった



この平らな場所がスミソニアンに展示されているアロサウルスの発掘現場

マーシュ側は怒り狂って発掘作業を加速させる。ちょうどこの当時、ワイオミングのコモ・ブラフにおいても両者のチームは（ピー）じみた発掘競争を繰り広げており、コモ・ブラフとガーデン・パークはコープ／マーシュ戦争の2大激戦地として名を残すことになるのである。

現在、ガーデン・パークの発掘場と言えれば必ず写真に出てくる、崖の上に何軒も石造りの作業小屋が並んだあの場所が、まさにここである。1877年には、崖っ縁に近い一角が掘り崩され、ディプロドクスの一連の尾椎、アロサウルスの断片的な骨格などが見つかったにとどまったが、その後現場が奥へ向かって掘り進められるにしたがって続々と新しい化石が見つかり、1887年にいったん発掘が終了するまでに、ここからは恐竜研究史上非常に有名な化石が何体も現れている。

先生は、平坦な現場のあちこちを指さしながら、ここは、例のスミソニアンに発掘状態のまま展示してあるステゴサウルス・ステノプスの見つかった場所、ここは同じくスミソニアンのアロサウルス・フラジリスの見つかった場所、そしてこっちが1900年、カーネギー博物館による再調査の際にハプロカントサウルスの一種（プリスクス種？）が発見された場所、というように、ピンポイントで場所を特定して行く。マーシュ側は発掘現場の記録が比較的整っており、各化石の発掘地点が正確にわかるのありがたい。

頭の中に、これら有名標本の姿を思い浮かべつつ、地面をたんねんに見て回る。ここもやっぱり、細かい化石の破片がなんぼでもころがっている。中には、かなり大きな骨の湾曲した表面がそのまま残っているものもある。皆相当量のかげらを拾ったようだ。

しかし、それにしても、考えてみるとこの発掘現場から尾根1つへだてた向こう側はもうコープの現場なのである。直線距離にして1キロそこそこだ。両者が同時に作業していた時期には、恐らくどっちからも相手の現場の物音が聞こえてきたのではないだろうか。どっちもよーやるわ、と言う他はない。

ここでまだまだねばりたいのはやまやまだが、生憎なことに空は再び雨雲に覆われ、ぱらぱらと小雨が降りだした。雨が本降りになると、この急坂を下りるのはつらい。やむなく車に戻ることとする。



背後の尾根の向こうはコープ側の発掘現場



フェルチ発掘場よりの眺め



獣脚類の巣の発掘現場

もし、もう少し上流で川を渡り、右岸の谷を1キロ半ばかり登れば、かの有名な、のどに鎧のあったステゴサウルスの発掘現場だが、まあそこまで行くのはちょっと無理のようだ。しかし、これで今日の巡検は終わりというわけではなかった。

少し川筋に沿って下り、先ほどのコープの発掘場に入る分岐点のやや手前で、先生は再び車を停めた。右手にはすぐ、山の斜面が迫っている。何があるのかと思ったら、この斜面の中腹で、デンバーのチームは恐竜の巣を発見したのだという。先生のあとに続いて、急な斜面をほんの20メートルも登ったあたりで、先生は斜面の表面に目を近づけ、またたく間に恐竜の卵殻をいくつも土砂の合間からつまみ上げた。見れば、なるほど、確かにこの粒子の粗い真っ黒なかけらは、これまであちこちで何度となく目にした恐竜の卵殻そのものである。先生によれば、これは中型の獣脚類のもので、卵の入った完全な巣はすでに博物館に運び込まれているという。何の巣だろう？ ひょっとしたら、アロサウルスかケラトサウルスのものかも知れない。雨はけっこう本降りとなってきたが、これでむしろ卵殻が洗い出されて見つけやすいというもんだ。全員、斜面にはいつくばるようにして卵殻を拾い集める。が、ちょっとこの雨はうっとうしすぎる。そろそろ潮時か。

拾った卵殻を大事にポケットにおさめ、急坂を滑り落ちるように下って車に戻る。さっきは気づかなかったが、道路の反対側、溪流の岸边に向かって木造のテラスが張り出し、何かの案内板が立っている。見ると、この谷一帯が有名な恐竜化石の産地であること、ちょうどこの対岸の斜面において、1956年、クリーブランド自然史博物館のチームが、ハプロカントサウルスの部分骨格3体分を発掘したこと等が記してある。あ、そうか。言われてみれば、マッキントッシュのハプロカントサウルスの論文に出ていた発掘現場の写真というのがまさにこの場所だった。ハプロカントはレアな竜脚類だと聞いてはいるが、少なくともこの辺ではかなりまとまった数が出ているわけだ。まだ、ハプロカントの頭骨を見たことのある人間は誰もいないが、いずれガーデン・パークのどこかでそれが見つかる可能性も十分残されているだろう。

と、いうところで、時計を見ればもう午後2時近く。大分腹も減ってきたし、雨も降り続いてい

る。今日はここらでお開きとしましょうか。

来た時は、それでもキャノン・シティの町からけっこうかかったような気もしたが、帰りの道はあれっと思うほど早い。巢の発掘現場から車に乗ってほんの 15 分も走ると、もう人里である。先



卵のかけらを探す



対岸の斜面からハプロカントサウルスが3体見つかった



お宝をゲットしてごきげんのケンイチ氏

生が、いつも現場からの帰りに腹ごしらえに立ち寄るという「バーガー・キング」で遅めの昼メシとなる。いやー、何だか夢中であつという間に時間が過ぎてしまったが、ほんまにええもん見せてもらいました。それにしても、かつて、マーシュだかコープだかの発掘チームのメンバーが、下剤のような水しか手に入らないと嘆いたその場所から、今ではわずか 15 分でダブル・パテの特大バーガーとコーラにありつけるとは、本当にけっこうな時代になったもんだとつくづく思う。

しかし、なんだかこのバリュー・セットはやたらにばかどかい。これでも普通サイズのはずなんだがなー。ふと見ると、カーペンター博士はお子様セットを食べている。あ、そりゃいい考えだ。こんなもん並の日本人には食いきれねーよ。

食べながら、ガーデン・パークにおける発掘作業のことなどがう。先生は料理がお得意で、キャンプ場では炊事をまかされ、一度に 15 人前くらい作ってしまうそうである。先生に尋ねられ、こちらもそれぞれ、なぜ自分が恐竜に興味を持つに至ったか、現在何に興味を持っているかなどについて説明する。山本氏が、ここまで持参した自作のチョコラ・フィギュアを取り出して並べると、さすがに先生はチョコラ（ないし CC）をご存じであった。ご希望の品を差し上げると、大変喜んでおられた。ああ、やっぱりこの人はわれわれと同じ精神的土壌を共有する人だと改めて思う。

帰途の車中では、皆さん今日の興奮と疲れがどっと出たか、ぐっすり眠ってしまう。助手席の筆者まで寝てしまうわけにはいけないから、先生と、沿道の風景のこと、コロラド・スプリングスに新しくできたという恐竜博物館のこと、「ディノプレス」廃刊のいきさつのこと、お天気のことなど、とりとめもなく話し合う。先生によれば、夏の終わりのこの時期にこんなに雨が降るのは前代未聞で、これは相当な異常事態らしい。

帰りの道はスムーズに流れ、午後 4 時半頃、博物館に無事到着する。明朝 9 時、職員通用門から入って先生を呼べば、バックヤードをご案内いただけるとの事である。今日は本当にありがとうございました。お疲れさまでした。

と、いうところで、さて今夜の宿探しである。実は先刻、博物館の並びのコロラド・ブルヴァード沿いに 1 軒、大きなモーテルを見つけてあった。先生によれば、博物館周辺はあんまり治安が

良くないからやめた方がいい、とのことであったが、博物館まで歩いて行ける距離ということもあり、ついたかをくくってそこに飛び込んでしまう。

しかし、すでに、われわれが駐車場に車を停めた時から、妙な雰囲気だった。3階の通路から、怪しげな黒人がじっとわれわれを見つめている。フロントのおねえさんはこれ見よがしのタトゥーを肩から腕にまとい、事務処理はすべて手書きである。シングルが一晩 40 ドルだから値段的には十分安いのだが、全員が3階に横並びの部屋をとり、ドアを開けて一歩中に入るなり後悔した。何がノン・スモーキングだ、部屋中それこそ吐き気がするほど強烈な煙草の臭気が充満している。誰かここで葉巻を喫いやがったな。おまけに電話をかけようとしたらどうしても外につながらない。腹がたってフロントにねじこんだら、先にデポジットを払わないと電話は使えないとぬかしやがる。何だここは！

後ほど、飲み物を買いに外へ出て、部屋へ戻ろうとすると、1階からエレベーターに乗り込んできたのはさっきの黒人である。3階だね？ と念を押して行き先階のボタンを押してくれたのはいいが、なんでこいつ、俺の部屋を知ってるんだ？ と思う間もなく、お前は音楽が好きか、と聞いてきた。まあ、ジャズならよく聞くけど、と答えたら、いきなり鼻先に自主製作のCDを突きつけ、俺のジャズだ、2ドル50だ、とくる。幸いすぐドアが開いたので事なきを得たが、その夜、筋向かいのコンビニへ出掛けた野尻氏などは、ジャンキーらしいホームレス女につきまとわれ、部屋まで追いかけられてドアをどんどん叩かれたという。夜中、あちこちのドアを叩いて回ってる奴がいたようだが、それだろうか？ まあ、注射針をちらつかせて金をせびる手合いでなかっただけもうけものだ。何にせよ、ブランディングのような田舎町ならともかく、アメリカの大都会の安宿は安かろう危なカろうであるということを、このモーテルは身(と鼻)に染みて教えてくれた。

でも、せっかく中西部一の大都会へ来たのだから、ちとナイトライフのひとつも楽しんでみようと、野尻氏を除く4人で(野尻氏はそういう旅は趣味ではない) タクシーに乗り、ダウントウンへ出かけてみた。筆者と大迫氏はジャズクラブの1つもあれば、という魂胆だったが、まずは食事でも、と、たまたま飛び込んだイタリアンの店が、

生のカクテル・ピアノなど流れていて非常に居心地がいい。もうここでいいやと、腰を落ちつけてワインを飲み始めた。

大迫氏には一種の特技があり、どこのお店でもたちまちウェイトレスのおねえさん(それも店でいちばん美人)を手なづけ、親しくなってしまう。今回も、われわれのテーブルについてブロンドのおねえさんが、昨年まで栃木で英会話の教師をしていたこと、お好み焼きが大好物であることなどをあつという間に聞き出し、意気投合してしまう。特技といえどもう1人、山本氏が素早く彼女の顔をスケッチし、似顔絵を渡すとおねえさんは非常に喜んでくれた。しばらくすると、驚いた事に、彼女自身がピアノの伴奏でミュージカル・ナンバーを朗々と歌いながらフロアを回り始めた。そうか、そちらはそういう得意技を隠し持っていたか。ここは料理もうまいし、こりゃ何ともけっこうな店に当たったもんだ。

すっかりいい気分となり、その夜はあの煙草臭い部屋でもぐっすり眠ることができた。ちなみに、店の名は「ブラボー！」。デンバー1の繁華街である Court Place の 1550 番、「アダムス・マーク・ホテル」の1階にある。デンバーにお越しの節は、立ち寄ってみられるのも悪くないだろう。

第6日 デンバー自然科学博物館

9月22日、朝9時。われわれはデンバー自然科学博物館の職員通用口を潜り、名簿に名前を書き込み、IDカードを胸につけた。博物館のロビーで待つことしばしか、やがて奥からTシャツ姿のカーペンター博士が現れた。

あいさつもそこそこに、さっそく先生はわれわれを引き連れ、職員用通路の奥へどんどん進んでいく。大きな鉄のドアをいくつか抜けると、もうそこは博物館の大型脊椎動物化石の収蔵庫であった。今回ここにいる5人は、全員こういう場所はずでに経験済みではあるが、それでも、初めての博物館の収蔵庫に入る時はつねに興奮を抑えきれない。あの、土ぼこりと鉄と冷たい鉱物と、かすかな酢酸の匂いが入り交じった独特の空気が、いやが上にも雰囲気を盛り上げる。

まず、先生がスチールの棚から引っ張り出したのは、ステゴサウルスの大型個体の大腿骨である。このサイズからすると、恐らくステノプスではな

くアルマトゥスか。先生がこれを持ち上げてみるという。どれどれ、と抱えてみると、いやこいつが重いなんの、まず 50 キロではきかないだろう。これがいわばオードブルで、この後、思わず



ステゴサウルスの大腿骨の持ち上げに挑む野尻氏



竜脚類の標本が詰まった棚

目を疑うようなものすごい標本が次から次へと現れる。とてもそのすべてを詳細にご紹介している余裕はないので、順不同で印象に残ったものにつき、以下にかんたんに述べておこう。

＊ガーデン・パークのカマラサウルス……ここには、グランディスとスプリムスの2種のまとまった骨格がある。先生が、前部胸腰椎のほぼ同じ部位の骨を2つ並べて下さった。

右がグランディス、左が 1994 年、「コープス・ニップル」で発掘したスプリムスだが、ごらんのように大きさが歴然と違う。これを組み立てたら、カマラと言えども大きさはアパトサウルス並になるのではあるまいか。さらに、同じスプリムスの座骨を出して下さったが、これだけで長さは1メートル近い。カマラの大きさの記録更新は間違いないだろう。

もう1つ、興味深いのは、骨が病変でごっそりとえぐられたように窪んでいるカマラサウルスの尾椎である。恐竜の病変化石はどこにでもあるが、ちょっとこれは見るからに重症だ。ただ、なぜこうなったのかは先生にもわからないという。



左が C.スプリムス、右が C.グランディスの胸腰椎



C.スプリムスの座骨。やたらにでかい

*シダロサウルス……この恐竜の知名度は決して高くはないと思うが、1998年カーペンター博士らにより記載されたカミナリ竜である。東ユタのシダー・マウンテン累層（白亜紀前期バレーム期）から、全身各部の骨格が発見され、当初ブラキオサウルス科とされていた。筆者自身、2002年の自著でこれを白亜紀のブラキオサウルス科の新属として紹介したことがある。ところが、先



カマラサウルスの病変した尾椎



シダロサウルスの前凸後凹型の尾椎



シダロサウルスの上腕骨(手前)と大腿骨(奥)。長さはほぼ等しい

生のご説明によると、この標本はアップチャーチの指摘にもとづき、すでに今ではティタノサウルス様類に変更されたという（もっとも、この2つがかなり近い関係にあることは間違いないが）。見ると、たしかにその尾椎は前凸後凹型で、大腿骨と上腕骨の長さはほぼ等しい。

一方、今年のSVPでは、新しい白亜紀の北米産のブラキオサウルス科が発表されるようだ。近い内に白亜紀前期の北米産竜脚類の多様性はモリソンの竜脚類を確実に抜くことになりそうである。

*ヴェネノサウルス……これも、最近カーペンター博士らにより記載されたばかりのティタノサウルス様類で、やはり東ユタのシダー・マウンテン累層から発見された。このフォーメーションはなかなかあなどりがたい。少なくとも装脰類の多様性においてはもはや世界一であろう。興味深いことに、ヴェネノサウルスは大小2個体が同じ場所で発見され、同じ部位の骨の比較ができる。先生は、成体と幼体と思われる前足を床の上に並べて下さった。中手骨は5本まとまるとゾウのそのように、垂直に体重を支える構造となる。指骨は同じ現場から多少見つかっているが、末節骨は1つも出ていないという。どっちにしても、指は相当退化していたに違いない。

*ステゴサウルス……この博物館にはステゴサウルスの重要な標本がたくさん収蔵されているが、先生にとって個人的に思い入れが深いのは、1967年に初めて自分が発見したというこの前足である。この記念すべき化石を前にポーズをとっていた。



ヴェネノサウルスの大小2体の前足



ケンイチ氏の記念すべき最初の化石



「のどに鎧」ステゴの正常なスパイクと折れたスパイク



折れたスパイクの断面



同個体の頭骨



その裏側。歯が見える

そして、何よりも有名な、あの、1992年にガーデン・パークで発見された「のど鎧」ステゴである。この個体の発見のいきさつ、発掘の経過、およびその死の状況等については「恐竜学最前線」第10号の、先生自身のレポートに詳しい。あのレポートにもあったように、この個体は尻尾のスパイクの1本が生前に途中から折れ、その断面が細菌感染によるものと思われる激しい癰痕状を呈している。先生によれば「溶けたロウソクのような」である。これなら感染症で死んでも確かに不思議はない。この標本には、ごく珍しい完全な頭骨もついており、上から潰されて変形したその実物もを見せていただいた。

ここで、山本氏が、ひと回り小さい他の個体の復元頭骨（キャスト）を指さし、この復元はちょっと頭蓋が細長すぎるのではないかと、自分は、ステゴサウルスの頭蓋はもっと幅広いと思うと指摘したところ、先生は各成長段階にある3つの頭蓋を並べて下さった。これによると、明らかにス

テゴサウルスは成長するに従って相対的に頭蓋が幅広く、寸詰まりになっている。どっちかというとノドサウルス型になるのである。

先生はついでに、ステゴの後足の完全な骨ひと揃いも床に並べて下さった。ステゴの後足は3本指と誰もが信じているが、よく見ると、指骨のない退化した第4中足骨がちゃんと残っている。これもなかなか見られない標本である。

＊サラソメドン……恐竜オナリーファンにはあまり知られていないが、カーペンター博士は北米の白亜紀クビナガ竜についてもこれまでに何編かの重要な論文を書いておられ、きわめて良好な保存状態の、クビナガ竜の模式標本がいくつかここに収蔵されている。その1つが、エラスモサウルス科のサラソメドン・ハニントニの完全な頭骨、DMNH1588である。これはコロラド州バカ郡（つづりは Baca である）プリチェット近郊においてセノマン期の地層から発見されたもので、ほぼ完全な全身骨格もそろっており、最近あちこ

ちの博物館で見かけるサラソメドンの全身骨格のキャスト（博物館の入口の天井からも2体つり下げられている）はこの骨格をもとに起こしたものだ。他の属より相対的に細長い上側頭窓など、この属の特徴がよくわかる。

この他、トロサウルスの顎、トリケラトプスの融合した頸椎、トリケラの角、プテラノドンのぺったんこに圧縮された頭骨、泥の中に踏み込んでそのまま3次元的に保存されてしまった大型獣脚類の足型など、貴重な化石が見たい放題触りたい放題である。ものすごく重い標本を1人で次々と棚から下ろして下さる先生も大変な重労働だが（われわれでは危なくしてお手伝いすることができない）、あまりにも情報密度が濃く、見ているだけでも消耗する。メモをとっているひまさえほとんどない。この記述内容の多くは、宿へ帰ってからデジカメの画像を再生して思い出したもの、一部は後から調べ直したものである。



各成長段階にあるステゴサウルスの頭骨



サラソメドンの頭



ステゴの後足。左端に縮小した第4中足骨が見える



サラソメドンの肩帯の一部。右上が上腕骨

全員、たっぷりデジカメのメモリーを消耗したところで、先生はわれわれを収蔵庫から連れ出し、職員用通路を通して研究室へと案内して下さいました。

デンバーの博物館をご存じの方なら、生命史のコーナーの一番奥で、例によってガラス越しに化



クリーニング作業場



研究中の化石が並ぶ棚



組み立て中のガストニアの腰帯

石のクリーニング作業を見せる部屋があるのを覚えておられるだろう。あそことあの奥が研究室になっており、そのどんづまりの階段をあがると先生のオフィスである。そしてここには、先生の主要な研究テーマである、北米の装脣類関連の貴重な標本がびっしりと収蔵されている。

壁ぎわに並んだ木造のキャビネットの中は、言うまでもなく現在研究中の化石だが、その大半はやはりヨロイ竜関係だ。いくつか出して見せて下さった引き出しの中には、ガストニアの各部の骨がきれいに詰まっている。

部屋の奥へ進むと、ガストニアの新しい復元骨格を組み立てる作業が進行中であった。

もともと、今のところ組み上がったのは腰帯の部分だけである。アンキロサウルス科の腰帯を内側からじっくりながめる機会はなかなかないので、あちこちから写真を撮らせていただく。それにしても、アンキロサウリアの恥骨が本当に縮小してしまっているのにはやはり驚いた。写真で、大腿骨の付け根にある、くるっと内側に湾曲した灰色の小さな骨がそれである。こういうものはやっぱり、そばで見てもみなきゃわからんもんだ。



大腿骨の付け根に見える灰色のフック状の骨が腸骨

さらに、階段を上がって2階まで案内していただいた。先生のオフィスはご覧の通り、実に既視感あふれる懐かしくも居心地のいい空間である。そして、まさに想像した通り、キャビネットの上にはゴジラのフィギュア。こういうものにうるさい富田氏の鑑定によると、かなりレアな、マニア度の高いお宝らしい。先生自筆のイラストも飾っている。

先生秘蔵のもっとも重要な化石は、みなここに集めてあるようだ。先生は、次々にキャビネットの中からヨロイ竜の頭骨を取り出し、テーブルの上に並べ始めた。

まず、こちらがガーゴイロサウルスの頭骨の原記載標本。そして、お次がエドモントニア。その次が、デンバーサウルスことエドモントニア……え？ 今なんとおっしゃいました？ はあ・・・デンバーサウルスはエドモントニアのジュニア・シノニムになっちゃった？ またバッカーのフライングかよ。あの人は新記載の数もすごいけど、抹消された無効名の数でも世界一なんじゃない



カーペンター博士のオフィス



あるべきものがあつた

かな。で、こちらがキャストだけど、シダロペルタ。例の頭蓋の皮骨板が未発達で、ヨロイ竜の装甲の起源論に一石を投じたというアレ。なるほどたしかに頭の装甲はきわめて貧弱ですなあ。この妙な破片みたいなのは？ あ、例の、北海道で出たノドサウルスというのがこれ！ へえー、思わぬところで思わぬものに。これは未記載ですね？ じゃ、写真は公開不可、と。



ガーゴイロサウルス頭骨



ガーゴイロサウルス後頭部



同裏側

いや、さすがだなあ。あるところにはこんなにあるもんだ。昔、モスクワで、タチアナ・トゥマノワ博士の研究室を見せてもらった時も、テーブルの上でうっかり肘をおいたらその下で何かごろん、と動いたことがある。下を見たら、タルキア・ギガンテアの裏返しの頭蓋の上に肘を突いててぶったまげ、ある意味こんなぜいたくな瞬間はもう二度とあるまいと思ったものだった。が、ついにそれをしのご瞬間が訪れたというわけだ。山本氏と富田氏は、裏返した各頭蓋の歯列を夢中で撮影している。そりゃそうだ。こんなチャンス、望んだって二度とはあるもんじゃない。

あーもう満腹。いや、肉体的にはぼちぼち腹が減ったなーという感じなんだけど、情報が完全にオーバーフローだ。ここらでちょっと一休みにせざるを得まい。

いったん先生と別れ、博物館1階のカフェテリアで昼飯。毎度アメリカの博物館にくるたびに痛感するのだが、彼我の博物館におけるホスピタリティのこの絶望的なまでの格差をいったいどうしたものか。新館になってからはどうなったのか、まだ行ってないから知らないが、科博の昔の食堂なんて、もはやこれしか選択肢はないのだと強く自己暗示でもかけなければ、とても入ろうという気が起きないような代物だった。



アロサウルス



シダロペルタ頭蓋裏側



博物館入り口のサラソメドン



「のどに鎧」ステゴ

昼飯後、博物館の一般展示の方をゆっくりと見せていただく。しかし、すでにバックヤードでさんざんいい目を見てきたわれわれには、ここの展示ももはや心底感激するようなものではなくなっている(特に筆者は新展示に変わってからすでに3度目なので)。何とももったいない話ではあるが、ここはひとつ、写真を並べるだけでごかんべんいただきたい。ただ、この博物館をご存じない恐竜および古脊椎動物ファンの方、デンバーに立ち寄る機会がおりなら、本当に悪いことは言わない、この博物館のために丸1日必ず空けておきなさい。見れば見るほど度肝を抜かれるような化石が目白押しだから。とくに、ガラスの向こうの小さな標本類をたんねんに見て回ることを強くおすすめする。というよりこれは命令である。絶対にあつと驚くから。ここの展示を見てどれほど驚けるかで、あなたの古生物ファンとしての格が問われると言っても過言ではない。



コエロフィス



ディプロドックス



カリコテリウム類(モロブス)



ブロンテリウム



ディノヒウス生態復元



始新世のコウモリ、イカロニクテリス(ワイオミング)

こうして、デンバー自然科学博物館の恐竜展示を骨までしゃぶった・・・と自分では思っているにも、実はまだまだたっぷり身が残っているに違いない・・・われわれは、午後3時、いったん博物館を引き上げた。しかし、今日の日程はこれで終了したわけではない。この日の夜は、お世話になったカーペンター博士にせめて一席設けさせてもらおうと、会食の約束をしてあったのである。先生のご希望により、メニューは寿司と決まった。

寿司？ 寿司だって!? そう聞いた瞬間、筆者と山本氏の脳裏にはあのおぞましい悪夢のような記憶が鮮烈に蘇ってきた。あれは忘れもしない1998年9月のこと、ゴースト・ランチの巡検から帰ったわれわれは、いろいろとお世話になったニュー・メキシコ自然史博物館の人々に感謝の意をこめて夕食に誘ったのだが、この時やはり向こうの皆さんが希望されたのが日本料理の店だった。アルバカーキーにいい店があると言うので、案内されるまま先導する車に付いて行ったらば驚いたのなんの。日本料理とは言うけれどスタッフは皆韓国人で、恐らく調理場にも日本人は1人もいなかったに違いない。ウエイトレスは全員ペラペラした原色のキモノに帯を極端に胸高に締め(チマの位置だ)、「エラシャエマセ」「アリゲタゴザマシタ」と全員が声をそろえる。天井からは盆踊りのように提灯がざらりとぶら下がり、 Teppan Yaki のコーナーでは料理人が包丁やペッパーミルを空中高く投げ上げるベニハナ・スタイルのパフォーマンスを繰り広げ、なるほどアメリカの田舎でイメージされるところの日本料理とはこのことか、とただ絶句するばかり。

で、まああなた、出てくる料理ときたら、誰か教えてくれどうやったらテンプレの衣をあれだけ固く固くばりばりに揚げることができるんだ？ シーフード・テンプレつつつても中身はオーシャン・スティック(カニカマ)、歯応えゼロ。せめて海老くらい出せよ、そこらのメキシコ料理屋でもちゃんとまともな海老を使ってるじゃないか。

そして寿司！ あの寿司！ 力の限りぎゅうぎゅうに握りしめたそのシャリは、空中60センチからの落下の衝撃に耐える強度を保ち・・・後で聞いたところによると、アメリカ人は醤油をじゃぶじゃぶぶっかけるため、よほどしっかり握らないとシャリがほぐれてしまうのだという・・・、まあ生で食っても死なない程度のサシミが上に乗ってはいいるのだが、シャリがべちゃべちゃで酢の匂いがつつん鼻につき、一口食って涙が出た。と言うよりこれはネタでもなんでもなく山本氏が証人になってくれると思うが、筆者は本当に気持ちが悪くなってトイレに駆け込んだのである。

日本勢はついに誰1人その寿司と称するものを完食することができず、折りに詰めて持って帰りはしたものの、二度と見る気もしないまま冷蔵庫に放り込んでおいた。ところがですね、こうして一晩冷蔵庫でかちかちに干からびさせると、適度に水気が抜けて、コンビニ寿司を冷蔵庫に一晩放置したのと同レベルまでお味がぐーんとアップします。タペのそれがうそのように、翌朝ある意味おいしくいただくことができました。

だから、その日の夕方、びくびくしながら先生の車についていったわれわれは、むしろあっと驚いた。この寿司屋はまともだ！ 太平洋からも大

西洋からもこんなに遠く離れたロッキー山脈のまっただ中で、よくまあこれだけ多彩で味の落ちていないネタをそろえることができたもんだと、全員感心することしきり。でもデンバーは中西部最大のハブなのだから、考えてみれば、首都圏の魚屋が築地から仕入れの品を運ぶのと同程度の時間でボストンからもシアトルからも新鮮な魚介類を空輸できるわけである。まあ、アナゴが入手できないためウナギの握りを出したり、メニューにギョウザやカツ丼が入っていたり、「ダイナマイト××」などというネーミングの料理があったり、という点がやはりそこはかたない異国情緒を漂わせるが、これはニューヨークでもシカゴでも同様だ。むしろ、この献立こそ日本人留学生の食性を考慮した、日本人向けの店である何よりの証拠と言える。

もちろん、お店のスタッフも正真正銘の日本人である。キョウコさんというウエイトレスのおねえさんは、ここの常連であるカーペンター博士をよく覚えていたが、いつもおとなしく黙々と寿司



絵を描くケンイチ氏



スシ・ハイツにて

を食べているこの人が、世界的に著名な恐竜学者であるということを今までご存じなかったようだ。先生のサインをもらって飾っておけば、この店は日米の恐竜ファンのたまり場になるかもしれないな。

寿司をつまみつつ、しだいに酒が回ると、皆口もよく回るようになる。先生とゆっくりお話できる機会はこれが最後とあって、ここを先途とみな次々に先生に質問をぶつける。

こっちも酔ってはいたし、どれが誰の質問かもうる覚えだが、ゴジラサウルス関連が山本氏、ヨロイ竜に関しては富田氏、絶滅関係が野尻氏であったことは確かだと思う。

Q・「ゴジラサウルスはコエロフィシス科の中では何にいちばん近いですか？」

A・「一言で言えば、ゴジラサウルスというのはまさに巨大コエロフィシスです。ゴジラサウルスの骨格で実際に見つかっているのは、頸椎、胸腰椎、恥骨、脛骨などで、全身の骨がそろっているわけではないから厳密な比較はできませんが、少なくともハルティコサウルスやリリエンテルヌスとは明らかにかけ離れてますね。科の中ではもっともコエロフィシスに近い姉妹群と考えていいでしょう」

Q・「最終的な大きさの見積もりはどれくらいになりますか？」

A・「腰までの高さはちょうどコエロフィシスの3倍あります。しかし、獣脚類は体が大きくなるほど相対的に首と尻尾が短くなる傾向にありますから、その分を若干修正して、まあ6メートルというのが固いところでしょう」

Q・「先生が一番興味のある恐竜は？」

A・「そりゃ何ととってもヨロイ竜です。最近、私がフィールドにしている東ユタのシダー・マウンテン累層の現場から、長さが1メートル近い非常に大きなヨロイ竜の頭骨が発見されてね、今その記載準備中なんですけど・・・」

Q・「1メートル！ それはもしかすると、世界最大じゃないですか？」

A・「いや、アンキロサウルスの一番大きな頭骨はこれよりさらに大きいですよ。それにしても、白亜紀前期末の時点における北米のヨロイ竜の多様性が、想像以上に高かったことは間違いないですが」

Q・「われわれの知人で本多さんという人が、ヨ

ロイ竜水生動物説というのを唱えているんですが、この意見についてどう思われますか？」

A・「うーん……あるいはね。私の知るかぎり、カンサスのニオブララ・チョーク層（白亜紀後期セノマン〜チューロン期）から発見されるニオブララサウルスというヨロイ竜は海成堆積層からしか出ていませんから、彼らが海を泳いでいた可能性はあると思います。しかし、海が主要な生活の場であったかどうかは、それだけでは何とも言えません。」

Q・「恐竜の絶滅の原因についてはどんなご意見をお持ちですか？」

A・「1つ確実に言えることは、恐竜も、その他の中生代の生物全般も、決して瞬時に滅び去ったのではなく、白亜紀末にいずれもある程度の時間をかけて漸滅して行ったということです。この事実があるかぎり、天体衝突が絶滅の原因であるとはとうてい考えられません。しかし、例えば、ロバート・バッカーは、白亜紀後期に一時的に大陸間の連絡が回復し、各大陸で孤立していた動物相が混ざり合って、互いに病気をうつしあった、などと言っていますけど、これもまたあり得ない話ですね。インドみたいに、当時他のあらゆる大陸から完全に孤立していた島でも同様に絶滅が進行しているんですから。つまり、天体衝突とは別に、時間をかけて全地球的な環境変動をもたらした機構を考えるべきです」

Q・「先生には学問上の論敵は存在しますか？」

A・「まさに、その絶滅理論について、私の博物館の上司であるカーク・ジョンソンと対立しています。彼はもうがちがちの天体衝突説の信奉者で、恐竜は一気に絶滅したんじゃないと私がいくら主張しても絶対に聞き入れようとしない。困ったもんです」

Q・「鳥の起源論についてはどのような意見をお持ちですか？ やはり、恐竜から鳥が進化したとお考えですか？」

A・「つまり、それ以外の考え方がありうるか、ということですね？ 鳥と恐竜の共通祖先が三畳紀の樹上性爬虫類だった、というジョージ・オルシェフスキーの仮説は知ってますし、それもありえない事ではないと思っています。しかし、哺乳類の進化の歴史を見ると、実際にまず地上で齧歯目が進化し、それが樹上に移行してから翼手目

が生まれたという例がありますよね？ これから考えると、地上性の恐竜が樹上性に移行して、それから二次的に滑空性の生物が進化したという可能性も否定できない。マイクロプトル・グイの存在はその証拠であるとも言えます」

と、説明しながら、先生は紙の上にさらさらと説明図を描いて下さった。筆者はすかさずその紙にサインをいただき、首尾よくせしめることができた。これは今筆者の大事な宝物となっている。

いやー、それにしても、本当に楽しい2日間でした。心身ともに十二分に満腹したわれわれは、その夜、店の前でカーペンター博士と固い握手をかわし、再会を約して分かれたのであった。

デンバーにこれからおこしの皆さん、もし日本料理の味がなつかしくなったら、コルフアックス通りとヨーク通りの角にある「Sushi Heights」へ行ってごらん下さい。もしかしたら、カーペンター博士に会えるかもしれないから。

第7日 ボールダー

今回のツアーは、今日で公式にはおしまいである。今日の目的地はボールダー。デンバーから車でおよそ1時間の距離にある地方都市で、ここには人も知る通り、かつてロバート・バッカーもわらじを脱いだ、あのコロラド大学ボールダー校がある。その博物館に、今回の旅のそもそもの発端であるゴジラサウルスの標本が展示されているのである。やはりここまで来たら、ゴジラサウルスに一目会わずに帰るというわけには行くまい。

往復2時間なら、別に急ぐこともない。今日はまったりデーということで、ちょっとガス抜きをしようという心づもりもある。

朝9時、あの臭くて危ない最低モーターをさっさと引き払い（と言っても、朝9時までフロントは鍵がかかっていて誰もいない。早立ちの客はどうすりゃいいんだ。最後まで最低の宿だった）、車に荷物を積み込んで出発。空はからりと晴れ渡り、空気はひんやりと冷たい。今朝の天気予報によると、すでに山の方では初雪の降ったところもあるらしい。本当にわれわれは、ぎりぎりで巡検可能なシーズンに間に合ったようだ。

昨夜、カーペンター博士は、ボールダーまでの道筋を地図に描いて下さった。その地図をたよりに州間高速25号をちょっと北へ走り、ボールダ

ー・ターンパイクに乗るはずが、皆油断していてボールダーの表示を見落としてしまった。あれ？まだかな？　と思ううち、道はどんどん田園風景の中へと入って行き、こりや間違えたと思った時にはもう緯度的にボールダーより北まで来てしまっていた。

しかし、それでもまだ出発から 30 分そこそこである。むしろもっけの幸い、コロラドの田舎道を走りながらのんびり行こうということで、西へ進路をとり、州道 25 号～119 号経由で北東からボールダーにアプローチすることに決めた。

いやーそれにしてもいいお天気だ。ふと気づくと、道路の左右に広がるのは一面のヒマワリ畑である。すでに花の季節は終わり、見渡すかぎりがかいヒマワリが、ぎっしり種をつけて首をうなだれている。こりや日本では見られない景色だというので、車を停めて皆で写真をとる。

道草を食いながらのんびり走り、さらに 30 分ほどでボールダーの町に入る。背後に岩山が迫るこの町は、すでに晩秋の気配である。どっちも大学町とあって、ちょっと感じはプロボに似ていなくもない。大学周辺を除けば高い(と行っても 7、8 階建てだが)ビルは見当たらず、その周辺にはこぎれいな邸宅が並び、空気の透明度が異常なほど高い。こりや紫外線もきつかり。

しかし、今回も例によって道がわからない。ターンパイクから入って行くと、町のメイン・ストリート沿いにすぐ見える場所だったはずなのだが、町の中はやたらに一方通行が多い上、大学の中はあちこち立ち入り規制区域があって遮断機が下りている。うろうろした挙げ句、野尻氏も幻惑されて短距離ながら道路を逆走までしてしま

い、本当にこの時は冷や汗ものだった。

それでも、何とか博物館を発見。地図の通りに走ってみると、ちゃんと道路脇に博物館の看板が出ていたのである。

ようやくその前にたどり着くと、建物自体は赤い砂岩の板を積み上げた立派なもので、日本のそこいらの国公立大でお目にかかれるようなものじゃない。木戸銭はタダ。

入口の小さな扉を入り、短い階段をのぼったところに番台がある。その右手の部屋が、めざす化石の展示室である。



ゴジラサウルスの全標本



同大腿骨



コロラド大学ボールダー校自然史博物館

中をのぞくと、ありゃ？ あっちこっちの壁にかかっているのは、「恐竜異説」などですでに目にしたバッカーのイラストではないか。すると、ここはもしか、彼のプロデュースによって作られた博物館なのだろうか？ しかし、なかなかこの規模の博物館にしては展示は充実している。大きな組み立て骨格こそないものの、部屋の中央には大きなトリケラの頭、ランベオの亜成体と幼体の頭、壁ぎわには各成長段階にあるクビナガ竜ドリコリンコプスのヒレ、ディプロの頭と頸椎のキャスト、剣歯猫ホプロフォネウスの骨格などが並んでおり、博物館というよりはアート・ギャラリーの趣だ。中には、基盤爬虫類ラビドサウルスの全身骨格などという、よそでは見たことのない珍品も混じっている。そして、部屋のいちばん隅のガラスケースの中に並んでいたのが、お目当てのゴジラサウルスの骨格標本であった。

なるほど、これか。確かに骨はわずかだが、見るからに原始的なこの脊椎といい、ほとんどピュービック・ブーツのない直線的な恥骨といい、まさしくこれはコエロフィシスの親玉に相違ない。頭蓋と顎の要素がまったくないのは残念だが、東部に何らかの装飾は存在したのだろうか？ 体長6メートルあったということは、三畳紀後期のアメリカ南西部において、こいつは生態系の中に、

後のアロサウルスやケラトサウルスに相当する地位を占めていたのだろうか。そういえば、カーペンター博士は、ゴジラにおける最大の謎の1つは、彼らがジュラ紀の生態系の中でどんな役割を果たしていたかという点だ、と、ご自身のゴジラ論の中で述べておられた（これも機会があればご紹介したい）。しかし、いずれにせよ、この恐竜がいなければ筆者とカーペンター博士は接点を持つこともなく、ガーデン・パークを訪れるチャンスを持つこともなく、したがってこの記事を書くこともなかったわけだ。ゴジラサウルスに深く感謝。 と、いうわけで、今回の取材のプログラムはすべて無事終了した。全員がそろそろ明日の早朝までである。



トリケラトプス



同恥骨・脊椎



剣歯猫ホプロフォネウス

その日のランチは、ボールドーのエスニック料理とお茶の店でカレーなど。さすがに復路は、ターンパイクをまっすぐたどって、往路の半分ほどの時間でデンバーに帰り着くことができた。3日前と同じ「ホリデイ・イン」にチェック・イン。午後の残りの時間を、皆さんはデンバーのダウンタウン散策に費やし、その夜は、筆者の提案により、最後のシメとなる豪華ステーキ・ディナーとなった。ニューヨークの名店、あの「ギャラガー」がデンバーにも支店を出していたのである。まあ、お値段もそれなりのものではあったが、アペリチーフから始まって赤白のワインを抜いて、最高に熟成したブラック・アンガスのステーキ・ディナーを食べてこのお値段なら十二分に納得である。

翌早朝、大迫氏と山本氏はここからシアトル経由の便で帰国の途につく。筆者と野尻、富田両氏はさらにロサンジェルスへ移動し、それぞれに取材を続けることになるのだが、恐らくこのHPの読者諸兄姉の関心を必ずしも引くものではないと思われるので(航空博物館のバックヤードの話とかVT信管の話なんか読みたくないですよ)今回は割愛させていただくこととしよう。

皆さん、お疲れさまでした。



基盤は虫類ラプドサウルス

◎金子隆一

写真の著作権は撮影者(金子隆一、山本聖土、ケネス・カーペンター)に属します。

著作権法に定められている例外を除き、複写・転載・転用等一切の行為はご遠慮ください。